特別
イ 4
3163
1(14)

新古今和歌集巻第十一

恋歌一

題しらず　読人しらず

よそにのみ見てやゝみなむかつらきや
たかまの山の峯のしら雲

音にのみありときゝこしみよしのゝ
滝はけふこそ袖に落けれ

人丸

足引の山田もる庵にをくかひの
したこかれつゝわかこふらくは

いそのかみふるのわさ田のほにはいてす
心のうちにこひやわたらむ

女につかはしける　在原業平朝臣

春日野のわかむらさきのすりころも
しのふの乱れかきりしられす
[illegible]

延喜御歌

紫の色には心あらねとも
ふかくそ人を思ひそめつる

題しらず　中納言兼輔

[seal]

みかの原わきてなかるゝいつみ川
いつみきとてかこひしかるらん

平定文家歌合に

坂上是則

そのはらやふせやにおふるはゝきゝの
ありとはみえてあはぬ君かな

人の文つかはして侍りける返事に
そへて女につかはしける

藤原元真

年をへて思ふこゝろのしるしにそ
空もたよりの風はふきける

九条右大臣女にはしめてつかはしける

西宮左大臣

年月はわか身にそへて過ぬれと
おもふ心のゆかすもあるかな

返し

大納言清蔭母

かほともよ糸とはいはい人しらめ
とふゆくさきをしらねはやせん

天暦御時歌合

中納言朝忠

人はよはさこゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]

大貳三位

ありまやまゐなのさゝはら[illegible]
いてそよ人をわすれやはする
[illegible]

謙徳公

あはれともいふへき人はおもほえて
みのいたつらになりぬへきかな

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

謙徳公

[illegible]
[illegible]
[illegible]関白[illegible]

くちをしと思ひ侍りけれは

本院侍従

我宿はいつこともなくまかりけれと
いそくもみえぬころもわかれやはせし

忠義公

音なしの滝もとゝろくはかりにそ
忍ひかねてそ思ひしられける

紀貫之

しら雲のたなひく山のさくら花
よそにてそみるへき山のまつ

源兼文

たのまるゝ思ひなきみと人のなす
ゆふくれはなとかくれぬらん

藤原惟成

みる時はいかにもみえぬ月の夕くれ
ことにまさるはかなしかりける

左近

文はありしなからのなかれそこの
ことならぬ人のよもすから

藤原義孝

夕雲乃かゝるもたえぬかりけん

おなし人のもとへ山いはねもとゝ
都しのふ　和泉式部
いふしまつやいつきのもとの草
せきいは千歳ふるともやはらん

源重之
つくは山は山しけやましけゝれと
思ひ入にはさはらさりけり
入道にける人あまたありける女はゝ
しらる
我なくて人はこゝろにくきと山
大中臣能宣朝臣
きみはかりんかたもりやけると
りかゝをいへはなかしかは
大江匡衡朝臣
人しれぬおもふ心はわすれん
山しかはわれやこゝろのかなしさ
女ともにまかりにけるとき
かゝる
清原元輔
しほふりん衣のうらなきにも
おもひ忘れぬもなしかたしき
金をはつかはせなはてうつり女に

もろ吹りまくらこゝろはあらしとそおもふまてよ
香をはまつこゝろにもてつしられぬらん

能宣朝臣

いくとせを咲ちるもとをたつねつゝ
あかなくにいくしほまよひきえなん
まいきちまち

躬恒

おく山の岩垣沼のみこもりに
ちるらまゝしもゐろやなにみたるらん

亭子院御製

大空をわたるはるひのかけなれや
よそにのみしてのとけかるらん

正月あめふりて風吹ける日女につかはしける

謙徳公

春風乃吹にもまさるなみたかな
わかみなかみもこほりとくらし

ことゝひて返事もせぬ女に

水のうへにうきたる鳥のあともなく
おほつかなさをおもふころかな

題しらす

曾禰好忠

かた岡の雪まにねさす若草の

とりのまゆそしし人はなかしきも
ねるをせぬ女のもとよりつかはしける
て人のよみせるかは二月ばかりにわすれ
よそにけるかな　和泉式部
あとたえてまちつる草のはつかなる
ちるをみてかへりのほとゝにも
都まてかくれ　藤原興風
秋の夕くれは絶なく流れくる滝の音
ひまもなしと言ひそのまくら
　中納言家持

梅咲けは梅のにほひもとをく庭の
かきねさくらもありまましや
秋風にゆふくれまさる梅にほひとも
　藤原元光
萩のした葉にかくれはつゝ
志のふ草の下葉のいろかはりつゝ
女のもとへつかはしける
　花園左大臣
ちかひしも今はかはるやしたまつ
折みしのちも紅葉ちりなむ

和歌の浦歌合に久恋といふことを

摂政太政大臣

石上布留の神杉ふりぬれと
色には出す露も時雨も

水無瀬恋十五首歌合に寄雨恋といふことを

太上天皇

わか恋はまきの下葉にもる時雨
ぬるとも袖の色に出めや

百首歌の中に恋の心をよめる

前大僧正慈円

我恋は松を時雨の染かねて
まくすかはらに風さはくなり

家に百首歌合し侍けるに祈恋の
心を

摂政太政大臣

さゝ蟹のいとてたやよく浪も見武蔵
ほしあへぬ袖たに人の結ふまて

寂蓮法師

思ひあれは袖にほたるをつゝみても
いはゝや物をとふ人もなし

水無瀬にて十五首のことゝも久恋といふことを

とさゝのゝ消るましつり

太上天皇

おもひつゝへにける年のかひやなき
たゝあらましの夕くれの空

百首乃歌の中に忍恋を

式子内親王

玉乃緒よたえなハたえねなからへハ
しのふることのよハりもそする

わすれてハうちなけかるゝゆふへかな
我のミしりてすくる月日を

吾恋ハしる人もなしせく床の
なミたもらすなつけの小枕

百首哥よミ侍りける時忍恋

入道前関白太政大臣

志のふるに心のひまハなけれとも
なほもるものハなミたなりけり

冷泉院みこの宮と申ける時さふらひ
ける女房を見かハしていひわたり侍
けるころ手ならひしけるところにまかりて
ものにかきつけ侍りける

謙徳公

けふくれ秋とうらみんとておもほえて
なきをしまきたのみこと侍よ
ねて　よみ人しらず
あらうはなのまくもかくれ物侍
思ひかぬ人とかへるさとやらむ
影きて次　貫之
の秋かひとかへぬるはしら露や
ちりぬるもてしはくけふとかは
道信朝臣

夫婦あまの衣波ゝ郎よこれにめこ
きくハつもりよるわたりのあふ
く流るとなき流るゝ次しさて男て
かりあそへ　三條院女蔵人左近
わかことふ袖のわかしかわるあやめ草
かりけ行かるゝ秋のとかもしるゝ都
五月五日ころ明けりくかりかな
　前大納言公任
郭公なくやさつきのあやめ草
かふいつかすゑ秋あまのさくらよ

返し　馬内侍

五月雨はいつもあやめにほとゝきす
ときはの時を人しらぬかな
菖蒲たになほかくれぬる五月雨に
くらのうしもかゝりつゝふかく

法性寺入道前摂政太政大臣

蜀魂こゑを末まてくとて花にきく
まつかひなくるゝかなしきかな

返し　一条内侍

雲井にてきけるもふかくそまつにけり

もろこしも夢にみしかはちかゝりき
思はぬ中そはるけかりける

人
かへし

ぬる夢にうつゝのうさもわすられて
人たのめなるをよそになくなるとき

題しらす　伊勢

みくまのゝ浦よりをちに漕く舟の
我をはよそにへたてつるかな

難波かたみしかき芦のふしのまも
あはてこの世をすくしてよとや

人丸

天のまかふ[illegible]のたなはたの
あさしハまさしくて意ハ深き心也
歌人ハ次
ことに深きうたことく此歌やハさもとこ随
深[illegible]にやうく毛之かへにかう
本[illegible]花のなかなる歌に在家の
ことにわもおもひしとそ思ふ
まゐるはこゝろの人事くもめ
いそ浮世の人は重きをみきも

時雨ふりおける冬のむかへのまつくへ
梅おもふ人乃ゆうハおもかけ
おもひとりこゝろさす[illegible]河
[illegible]ハ袖てしくもみえるは
水くきの跡のあとふきを吹て
[illegible]はなへ[illegible]こゝ意もと思ひ
紅葉をあとこそ流よ深き
[illegible]とかくしてへそ思へん
女乃もとより深く[illegible]
[illegible]高きはしき[illegible]ハ

中納言兼輔

みれは又袖まこほるゝ涙袖涙
いとゝろもかくなかりきみゆらん

題しらす　[illegible]

あきこほりまた心もとなくおもふにも
夜ふかくる峰をこし一群
洞川もなくうちわたれるかなと
きしるゝ人のおもひいるらむ
女まつらしゆく

貞方朝臣

あすはまたん人のえゆのゝ世の中は
ましもしうそぬるはしや恨みん
女乃秋乃こゝろつゝこそおもひしらるれ
まきかえのこゝろの色つゝもさそはれ
かれとももれはもえつゝわたる

題しらす

かへるさをいかにとゝはゝ紅のなみたに
色もかはる袖のしたかはり

小弁

とりあへすふりてあふるゝ風そしるらむ

伊勢

さつきやまはなのちるらん波乃ゆくへし
人まつらしこゑ

藤原清正

あま海乃うらにあまのまつらかり
うらくもさくらしもかゝらぬ
宮こしの

源景明

あかなくにおもふもなかしよのはしの波乃
まちつゝおなしゆめのいつみわか
秋のよなく

貫之

足引の山したかけのいはなみ深

わくいくそ人ぞしらしを
花しるらん山したにこ草ふか
ゆくしもおもふ人のかた

坂上是則

小倉峰のしらくもの百聲乃草のたえまに
まちしにほふらんまたしもふかき

菅原輔昭

松やまの火も夜の葉のしたに
くらしやわかれ人しれぬ
なつのよのさわく人

いつもきこえぬ恵のかせらゝな
をきのはにみたるゝかのこゑ風よよ
ゆふ暮といふはかりそいかゝなる
権中納言師時
あきの風よしのゝ山のおく深み
はなをりゝさえもさかりやしぬらむ
百首歌よみ侍りし時
摂政太政大臣
くもりなき夜半の月影すみぬれは
さやかにもみえぬおもかけしは風

暮いさゝの次
式子内親王
しつへをよ鈴なれはよくく秋の
いまもきこえぬ色への声は風
権中納言長方
紀のゐや梅のはなもとよりのこ峰
ゐをとりはいよいよまとかそしかな
法性寺入道前関白太政大臣家歌
合によ
権中納言師俊
つゆてらせ人のつゆもよしみけれ
あしの葉の秋のまそくよりいつまて

和歌所にて会に忍恋をよめる

摂政太政大臣

なには人いかなるえにかくちはてん
あふことなみにみをつくしつゝ

隠名恋といふことを

皇太后宮大夫俊成

あまのかるみるめをなみにまかへつゝ
なくさのはまをたつねわひぬる

題しらす

相模

あふまてのみるめかるへきかたそなき
まだ波なれぬいそのあま人

業平朝臣

みるめかるかたやいつくそ棹さして
われにをしへよ
あまのつりふね

新古今和歌集巻第十二

恋歌二

五十首歌たてまつりしに寄雲恋

皇太后宮大夫俊成女

下もえに思ひきえなんけぶりだに跡なき雲のはてぞかなしき

摂政太政大臣家百首歌合に

藤原定家朝臣

なびかじなあまのもしほ火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

百首歌たてまつりし時恋歌

摂政太政大臣

恋をのみすまの浦人もしほたれほしあへぬ袖のはてをしらばや

恋のこゝろをよめる

二条院讃岐

見るめこそいりぬる磯の草ならめ袖さへ浪の下にくちぬる

しのぶる恋といふことをよみ侍りける

俊頼朝臣

君こゝをなつかしみ満ちしほたるゝ紀
さしほりそのことゝもしらぬかな
さのみふかくこもりぬると

前太政大臣

しきしまややまとしまねも若み氏
神代よりしきしまのことのはも
たちかへるかみよのはるのかすみ部
今もかはらぬ君の代哉

摂政太政大臣

もろこしのやまとしまねの雲の
さかえはしるくみゆらむ

まつかふいさくらにとまるかたらとも
ゆきの色あさみかくれなとまかせ

後徳大寺左大臣

ふくかせにもみちのいろやはら
さくらの花の草のくもとつゝ

殷富門院大輔

もろこしやまつふかき松の色や
こゝろやまとしはのみちのさかし
君かよのかきりはしらむ

近衛院御製

恋しともいはゞこゝろのゆくべきに
くるしや人めつゝむおもひは
忍ぶ恋といふ心をよみ
侍りける　花園左大臣
人しれぬ恋に我身はしづめども
みるめにうくは涙なりけり
題しらず　神祇伯顕仲
あさもふといはぬはしるやしらずとも
いかにもとききゝ袖の涙哉
思ふ恋のこゝろを
清輔朝臣
人しれずくるしきものはしのぶやま
したはふくずのうらみなりけり
和哥所の歌合に会まて逢恋の心を
雅経
須磨のうらくしのゝめの山のはの雲
つれなさはあともしらぬ雲まそて
千五百番歌合に
左衛門督通光
つらきをもあはれは思ふらん山のはかくれども

落葉にうつもるゝ千鳥のこゑつく

二條院讃岐

ちりつもるくもゐにかはる人めのみ
志のふ我身にあまりなくなりにけり

和歌所にて各述懐といふ
事を

春宮權大夫公継

志ぬはかりいつまて人のうきをのみ
せきとゝめてもくりかへし水のあはれ

題しらす

信濃

人もなき御ゆきのあとにさきにけり
なかるゝ水さへ袖にかゝくのみ

西行法師

まちわひてひとりねぬ夜は獨ねて
人かおもかけそおもかけつるや
ねならぬぬ我身となりそなく
志らせはやよのうちにそみな

水無瀬の恋十五首歌合に春恋
を

摂政太政大臣

草梅の中に花の(？)いかにもつる(？)
わかれてふたゝひしつるゝ(？)

入道前関白太政大臣は後の世のためとて[illegible]
あらん人はよく後世祈るべし無道乃人
をと　　　　太宰大弐[illegible]
後乃世をさとりてふかく[illegible]
[illegible]やさしき事もあり[illegible]後乃[illegible]
大納言[illegible]道文[illegible]
[illegible]女[illegible]後[illegible]
[illegible]
　　　　よみ人しらず
[illegible]

後乃世まで[illegible]
[illegible]大納言[illegible]中納言[illegible]
近衛乃帝乃[illegible]
[illegible]の[illegible]女車[illegible]
[illegible]
[illegible]
なし　　　　前大納言[illegible]
いにしへの[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]

左衛門督通光

なかめわひそれとはなしにものそおもふ

雲のはたてのゆふくれの空

雨のふる日女につかはしける

皇太后宮大夫俊成

思ひあまりそなたの空をなかむれは

霞をわけて春雨そふる

水無瀬恋十五首歌合に

摂政太政大臣

山かつのあさのさころもをさをあらみ

逢て月日や杉ふける庵

歌合に忍恋といへるこゝろを

前大納言忠良

思へともいはて月日はすきの門

さすかにいかゝしのひはつへき

百首歌たてまつりし時

皇太后宮大夫俊成

逢事はかたのゝ里のさゝの庵

しのに露ちる夜半の床かな

入道前関白太政大臣に侍りける時百首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原元真

[illegible]

[illegible]

藤原義孝

いつまでの命もしらぬ[illegible]

[illegible]

崇徳院に百首歌たてまつりける時

大炊御門右大臣

[illegible]

[illegible]

入道前関白家に百首歌[illegible]

[illegible]

藤原基[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原秀能
もしほやくあまのいそやの夕烟
たつ名もくるし思ひたえなて
海辺恋といふ事をよめる
定家朝臣
すまのあまの袖にふきこすしほ風の
なるとはすれと手にもたまらす
摂政太政大臣家百首歌合に
寂蓮法師
ありとてもあはぬためしの名取川
くちたにはてねせゝのむもれ木
千五百番歌合に
摂政太政大臣
なけかすよいまはたおなし名取川
せゝのむもれ木くちはてぬとも
百首歌の中に忍恋
二条院讃岐
なみた川たきつ心のはやき瀬を
しからみかけてせく袖そなき
摂政太政大臣家百首歌合に

二条院讃岐

よそなからあやしとたにも思へかし
恋せぬ人の袖の色かは

恋歌とてよめる　よみ人しらず

思ひあまりおつる涙をせきかねて
あからさまに袖よりほかにもらしつる

入道前関白太政大臣家歌合に

道因法師

くきさに井よ涙のそのなるまゝに
わくしほまそと君よとゝや

百首歌の中に　式子内親王

夢にてもみゆらんものをなけきつゝ
うちぬるよひの袖のけしきは

かくしはへりける女の夢にみえけれはよめる

殷富門院大輔

さめて後夢なりけりと思ふにも
あふはなこりのをしくやはあらぬ

千五百番歌合に

摂政太政大臣

身にそへるその面影も消ななん
夢なりけりとわするはかりに

菊の花わくらはとこそおもひなれ
難し次　　　　大納言公宗
夢ちにもちるをはなとやみつらん
つきせぬ花はわか心なれ
平兼盛　　右大納言忠良
名にしおはゝみをしのふ篠の葉もかよふ秋風
みるからになかめらるゝはかきりなく
深川　みちこえとはゝまと
正三位経家
みつのあけわたる川瀬ほとゝきす
さわてハ嶺とはすれてほとゝきす
ともをきてしるとゝに信恵といふもの
前大僧正慈鎮
たのめてもつきはそうみて
幾春をむかへて雲井のほとをきみ
権大納言実家　百首歌の中に
中院大納言家房
みよしのゝ山にかゝれる雲のほの
さくらにかゝるをかへてあかすかな
家隆朝臣

富士の嶺の煙もなほぞ立のぼる
うへなきものは思ひなりけり

名立恋といふ心をよみ侍りける

權中納言俊忠

[illegible]名のみ立田の山にたつ雲の
ゆくゑもしらぬながめをぞする

百首哥の中に恋のこゝろを

修理大夫

逢ことのむなしき空の浮雲は
身をしる雨のたよりなりけり

大納言通具

わが恋はあふをかぎりのたのみだに
ゆくゑもしらぬ空のうき雲

水無瀬恋十五首哥合に春恋
の心を

皇太后宮大夫俊成女

面影のかすめる月ぞやどりける
春やむかしの袖のなみだに

冬恋

定家朝臣

床の霜枕の氷きえわびぬ
むすびもおかぬ人のちぎりに

摂政太政大臣家歌合に暁恋

有家朝臣

つれなさのたくひまてやはつらからぬ
月をもめてし有明の空

宇治にて夜恋といふことををのこ
ともつかうまつりしに

藤原雅経

袖の上に誰ゆゑ月はやとるそと
よそになしても人のとへかし

久しき恋といへることを

秀能

[illegible]しのては[illegible]の[illegible]も
[illegible]ぬ思ひは[illegible]

家に百首歌合し侍りけるに祈恋
といふことを

摂政太政大臣

いくよわれ浪にしをれてきふね川
袖に玉ちる物おもふらむ

定家朝臣

年もへぬ祈るちきりははつせ山
尾上の鐘のよその夕くれ

く思ひけるころの歌

皇太后宮大夫俊成

うき身をはわれたにいとふいとへたゝ
そをたにおなしこゝろとおもはむ

題しらす　権中納言長方

恋しなんおなしうき名をいかにして
あふにかへつと人にいはれん

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつから
あらはあふよをまつにつけても

宜秋門院丹後

つれもなき人の心はうつせみの
むなしきこひに身をやかへてん

西行法師

なにとなくさすかにをしきいのちかな
ありへは人やおもひしるとて

思ひしる人ありあけの世なりせは
つきせぬ身をはうらみさらまし

新古今和歌集巻第十三

恋歌之三

中関白かよひそめ侍りけるころ　儀同三司母

わすれしの行すゑまてはかたけれは
けふをかきりの命ともかな

忍ひたる女をかりそめなる所にゐて侍りてかへりて朝につかはしける　謙徳公

かきりなくむすひおきつる草枕
いつこのたひを思ひわすれむ

題しらす　業平朝臣

おもふにはしのふることそまけにける
あふにしかへはさもあらはあれ

人のもとにまかりそめてあしたにつかはしける[?]　廉義公

昨日まてあふにしかへむと思ひしを
けふは命のをしくもあるかな

百首歌の中に　式子内親王

逢ふ事をけふまつかえのたむけ草

いくよしほにぬれぬ袖ハしらなむ
頭中将に侍りける時五節所のわらはに
いはせて侍りける[illegible]
[illegible]

源正清朝臣

あしたよりかくふかくなりぬるおなし山の
かはらの[illegible]よ袖ハぬれつゝ

西行法師

あふまての命もかなと思ひしハ
くやしかりけるわかいのちかな

三条院女蔵人左近

人心うすはなそめのかり衣
さてたにあらて色やかハらん

曽風

をしむともちるをはいかゝとゝめなむ
ゆくふかき花のなこりをそふくかせかな

藤原為頼朝臣

まつ人のあるかとおもひやりつゝ花
こそ見えねこのまよりこそ
まちつらん人もありやとかへるらん
志らぬ人とたのまれて

伊勢

夢とても人にかたるなしるといへハ
手枕ならぬ枕たにせず
題しらず　　和泉式部
枕たにしらねハいはし見しまゝに
君かたるなよ春の夜の夢
人に逢ひてのちつかはしける
一宮内侍
ことはりもあらても人にかたらふは
夢見えてほとしもなくて夜を
女のかくる
為家卿女

はかなくもまとろむほとのはかなしや
一夜ハ夢とそ思ひとられし
題しらず　　高倉院御製
とけてねぬいのちとも思ひをさへおもほえて
なくさむる月の見えこそ山
福原の
おもの屋のまつの草のをはる
やくもとくもちともわかるゝ
題しらず　　よみ人しらず
うたゝねの夢のかよひ路の手枕

ねぬるよのまきと人はまつらん明
人しれす恋はわひぬる妻もなき
ちうことも世をうる人はつらき
あ様
ゆすりまとひ菖蒲のしつく旅人は
下紫乃香のみにしまぬ人はなき
数しらす
明ぬる花の散まてはまたあた浪
定方朝臣
袖はさもやけてあやなき旅人
伊勢

年をへてさしもあらぬ黄なる菊の色ハ
散りくるさくや色をも残
九月十日あまりの夜更に
ゆふくれにさそはれやすくつらくおもひやられ
うつれはあはれなりしおもひやられ
秋乃夜のさひしさ月の夕に入まちよ
太宰帥敦道親王
やもとひとつ物をりしらかれ
たいしらす　読人しらす
なれもあつきの千とせの秋なりけれ

見えぬ人にいはまくほしきめくりあひの

近江更衣にたまはせける

たのめしもめつらしけなるあひ見ても

延喜御製

あさみとり春はゝかりてたのまれよ

返し

更衣源周子

わかれゆく人をまちけんとおもはねは

けふまつらふこのはまとのはよ

題しらす

右大臣清慎公

あをやきのたえすもいはゝいかにせん

いはれねはなとかあひみぬはかなさを

貞信公

思ひ出ていもうらめしくおもへとも

なきうらみつゝ葉ことのはのかす

清慎公

むかしおもふこゝろはなとかたえすのみ

[illegible]

藤原清正

あまつかせふけゐのうらにゐるたつの
なとか雲ゐにかへらさるへき
女郎花よるよひくれぬそへをしな
つらかる

大納言清蔭

あくといへはしつ心なき春の夜の
夢とや君をよるのみはみむやつん華
絶ぬるの夜もひるもあかすまつそ猶
まちわひぬ人はとゝめて我とゝめとも
いきよふのしらまるまて

和泉式部

ときはしもあらしもしらん人後よ
ま夢かよにはよよかなきよふみまて
影さへにし

赤染衛門

かはりきさしとつむ地のよ
明ぬめのつねにはきそわかる
きぬひら猶やかてもあしたよ
つらかる

九条入道右大臣

聞つゝも君かゆくゑのみちとをめ
いふことにもたえぬいとゝうつれぬ

小倉のやまほとゝぎすは
亭子院御歌
手鏡よみ給ふをきゝて紀貫之かは
明ぬとやつくれどもなきわたる
難きこゆ　若菜推哉
ましきまゝ夜はふけてなく月に
長明の月には人まとひわたる
大織のしなをきゝてなきやむ
なかりしとやかるる女よ
貞方朝下

あきらてやよ袖かわきぬらむ
若菜にかゝれやまほとゝ人
二条院讃岐あさりかきをみる
よろこびとしふる事とて
二条院讃岐
明ぬまにしらきをみしかやま
人の袖にしらぬまゝつらき
難きことも　西行法師
西行のかわりかきわれしなき
冬よりかいふて人の月小とめて

後京極摂政太政大臣

きりしこ念嬢にたのむ袖のわかれは
明てゆくあかつきの袖のかたみの

女の中まて梅こそいつ人とそまれ
つきふまむそのつくへてあるをは

右大将殿下

きふれ秋まて君かよるはうつゝ之かけ
やはらかにしもて法ふまゝのいは
女の中とまかるまて心を例ふは
法ゆふれはるまて流のうへわれ

皇后宮大夫俊成

法ふへまてあはれのふかさ月のかけ
うつゝのくるみちしらの香
三条関白女御入道殿
なりたよつし
わかれ

花山院法皇の

わかはしくおおふつきにかゝるを
法まてほとゝ君に袖をこゝろや

法性寺入道前関白太政大臣家の歌合
に

左京大夫道経

庭のまゝに夕の露をおもふや

花さそふまつもみちの御なくもなく竹
朝忠次　小侍従
まつよひにふけゆくかねのこゑきけは
あかぬ別の鳥はものかは
菅原為長
ことしもまたなほやすらはてかえん
くもきえてまよふへきかは
西行法師
夜明はかすみはわかやよひの雲
たゝよふさくらにしめゆく

清原元輔
大井河のゐせきの水のわくらはになる
けふはたのめし暮やあらぬ
しのふと契りける人はあらしと思
はかれは　よみ人しらす
夕くれはまつかせさむきくもゐにも流
おのかやまちもやものふしつらす
西のそら人よ古今歌にかへ侍る
くろは
宮内卿下
ありあきとなくつるおもしろきかな

ふしねふくさまゝ行ゆふ山の人
恵乃上のとも　太上天皇
たかせはしはら人をまつらむ山本は
ねふもしめそ行よりの月
みるやしまそは恵十ゑきの今ゝ夕
恵とふくるらむと
攝政太政大臣
ふるさとへと思しいまそめ松子はかよ
まち出しものを山は緒の月
寛の風恵をそ　宮内卿

ゆふやみのはしは乃かはらなる風たにも
まつよひきしるさし頃まとふ
秋部次　西行法師
人はこそ風はわきても更めくる
ありあまり巌は青そても
藤原雅経
いつく吹見むかた更はのえまふ
たのむる里は松風は故す
鴨長明
たのめそく人もかりはむなるて

さゝよふけめくるはまつ風の音

藤原秀能

とこ海とたのめしことをわすれしを
こゝろもふくるまで月やまつらん
待宵といひつるかねのねをきく

式子内親王

君まつとねやへもいらぬまきのとに
いたくなふけそ山のはの月
恵おもふとそこにもあらぬ

西行法師

たはぬよたくやと待よひのまの
文ねるそこのふものうは
なるおもひのみや人はうらん
読人不知
待よひのつきはかくまつ明の月
おほとしく次
恋しとは
思こんといひ夜とよ道めハ
さゝきまめ梅ゆ悪てかゞみ

人麿

あをよ山おほつゆふて宮きすよきて

君まさてハ袖のもれなん
たまくらの光しなとつきにけるかな
よひの間に一雨よきあひて枕ならぬ
われハ峯をぬひてそしらる

馬内侍

ちる事ハ是やうきよの桜なれん
若草のまきしも衣のよそわ
こ唐清まとこそあれやと清く
乱れハ

嚴子女王

ふれしものハふるき松をかれしやひたる鶯

しらやまし花もたとなつらん
おひてそ後あせつる花女よ

坂上望城

香ぬのふ秋の野分にわすれぬ
いつれのちらなりしつよしなれある

三条院女蔵人左近まかねは又
くとせぬハさつまりれハ

安法法師女

よもすから月猶みつハ萩のはなる
つらとそらつ涼しくすへし

題しらす　　　　　中納言家持

あしひきの山かけ草はかれにき思
こゝろやわたらんあふよのしらとふこ

延長御時の
あかゝよのそらふみやかてうちすへて
つりふねのともしもきえやすき年

権中納言敦忠
はつかなるなかはらぬさよもすから
かはとものはしをはとたゝ流る

源重之
おもひさへをかまよ

霜のへよそねふる雪ハ空のみかハ
りとのこひ〱しとゝなりにけり

題不知　　　　安法法師女
はるかなる山のあなた家のうちに
見えしよりわかれつゝゆかん

重之
山しなのかとにはゝしこそわきさへ
袖のかめやいつもとゝへらん

貫之
みやこかたよりいてゝ夕されは

[illegible]

女[illegible]男[illegible]

[illegible]女[illegible]

[illegible]之文

[illegible]

人[illegible]

[illegible]歌

[illegible]

入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

女なからしくさいはまゐりしとやて
後なきとおもへとあはれけきいつかし
かな
右近中将道
つらしとは思ふ物からこひしきは
きのふもけふもこかれまさり
宮内卿かるさまに侍りけるに女のもとへ
こしらへかへりけるをこゝろよくかへし侍へる
世の中のよはりのつゝを
よこゝろ人に
宮内卿くろかみのかみはかりとしるそ

あかつきのこゝろのゆくへはしらすとて
左
兼昌もしいのはぬかしはしむ
なれはかなかれるかたをたにもとはの
小侍従
つれなさはうらこゝろはゆるよ
しられさかてゆけらせむすひ
殷富門院大輔
なをしまのあまのそてたにも
しほれてのかきてまつるかへなや

刑部卿頼輔

こひしなん命ハなほもおしきかな
おなし世ニあるかひハなけれと

西行法師

哀とて人のこゝろのなさけあれな
かすならぬにハよらぬ歎を

身をしれハ人のとかとハ思はねと
うらみかほにもぬるゝ袖かな

女につかはしける

皇太后宮大夫俊成

よしさらハ後のよとたにたのめおけ
つらさにたへぬ身ともこそなれ

花の

有家朝臣[illegible]

たのめをきしそのことのはをたのみつゝ
うきよのなかの夢は[illegible]

新古今和歌集巻第十四

恋歌四

まれに侍りける時女につかはしける　清慎公

よひよひに君をあはれと思ひつゝ
人にはいはてねをのみそなく

返し　よみ人しらす

君たにもおもひいてける宵々を
まつはいかなる心ちかはする

かれ渡り侍りつかはしける

あつまにさためなき世と思ひしを
とふ人は心のうちにまつ人の
うらみもつきぬ事にそありける
こころとはさらにしらしなかなかの
あふ事はいつをかきりの

謙徳公

わすれてはうきよのなかにふるとても
ちよもしつくるかひもあらなん

恵子女王

ほとゝもなく恋ふる心はなになれや

わすれしなといひし人もいまもしられけり
大納言公任　たきのおとはたえてひさしくなりぬれと
なこそなかれてなほきこえけれ
あらさらんこのよのほかのおもひてに
右大将道綱母
なけきつゝひとりぬるよのあくるまは
いかにひさしきものとかはしる
儀同三司母　わすれしの
ゆくすゑまてはかたけれは
けふをかきりのいのちともかな
のこくよむきはつきつくしまやまたま
あらぬよをやいのちあらんとおもひし
伊勢
ことのはにしなれはかはるこゝろかな
ゆめとのみおもひけるかな
右大将道綱母
なけきつゝひとりぬるよのあくるまは
いかにひさしきものとかはしる
天暦御時の

葛は菊にまかりぬるもみぢも梅九條
咲けるをけふのつとにうつろふ
久しかるまじきものとおもふ人は
匡衡朝臣歌
雲たちやく野辺は萩紅葉はおもひ
ふるの人かくらき海をこえるに
西宮わたし大人一首
あさちふのおもふあやめのやうなき世の
つらぬる草はくもりつゝも
春は腰てとましもりて侍るさらに

なゝまとのれいとらへわたりまゐる宣旨
つたへうつめるやとはいはれ也
おほせ給ふ御なりをうつしの紅葉は
つかさ
の御せうそこん御たしもとしは御つと
もとの林の紅葉をそへつかはさる
女御藤子め
清凉殿事
天暦御時の
いにしへまいらたゞはちつる縁こと給へ
とたゐりはさねるもゆかしわかれ
女御はさしきよ頼つゝはつる

生蓮法師 右
こほしきはなはことにかほるとも
うらゝに雲井よりまよふ此のふ
法師　　女房雅経つゝめき
思ひやるふかいはくものあかれ梅とも
なかの雲井より鶯のこゑきこゆらん
麗景殿女房によみおくりて侍る
ある日梅壺女御女房より
後生蓮法師 右
春のみゆきにみゆるほとは青柳の

いとかゝる袖のうへに人のあひ見ん
法師　　女房若菜集 左
青柳のいとくりかけてみたるゝこの花哉
ひとかすめとも思ひの外にむかし
又つゝける　　後生蓮法師 右歌
あをやきの糸はみたるゝくれはとも
思ひみたれん人はなにのうへも
法性寺　　女房まき
いさこえてまてしあけしぬ梅の花
ちるらんといはゝたゝきまん

をやすみかへる女によみてあはせ
ちかひありけるつらしわれ
　　　貞文朝臣
いにしへのあふひと人はとかむとも
なほそのかみのけふそわすれぬ
　　　よみ人しらす
ゆふまくるあふひのかけにとしへぬれ
あひきとてあふひやそのかみのしるし
なれるはのみやのあまつくる
　　　三條院御歌
あふひてふなをたのみつつけふの日を
あはれあふやはかるともおもふ
　　　伊勢
さかきはのやをとめ山のかけにあれ
はまきのしもおもふこころに
　　　中務
いつとてもあふ神とたのみをかけしかも
月はおなしるものなくそかへる
　　　躬恒
さくらはなみ山かくれのあれはてし

ふくるまゝにつの秋の夜のにやく
讀人しらす
あまのはらとも極しあけの月かけは
いふ人もみえつゝまことかな
なかめつゝ月をまちてこそすみわたる
雲のはれまにいてくる月かけ
人しれぬまつかたかなしき
紫式部
めくりあひて見しやそれともわかぬまに
くもかくれにし夜はの月かけ
西行　　よみ人しらす
たちのほる松の山の端も入あかぬ雲
ころの月ころはさやし月影
歌よみ　　前大僧正
いかにとかくまての月まつよ
源よりまさやなかめつゝ
かし影のわすれぬ人へつ
入かたそらにすみわたる夜はの月
後徳大寺左大臣

うき人の月はなにそのゆかりそと
思ひなからもうちなかめつゝ

西行法師

月のころやうはのいへとよめるうたに
かたらひしものいひけるにはかなきを

くまもなきおりしも人を思出て
心と月をやつしつるかな

物思ひてなかむるころの月の色に
いかはかりなるあはれそふらん

八条院高倉

曇れかしなかむるからにかなしきは
月におほゆる人の面影

百首歌よみ侍りし

太上天皇

わすらるゝ身をしる袖の村雨に
つれなく山の月は出けり

千五百番歌合に

摂政太政大臣

めくりあはむかきりはいつとしらねとも
月なへたてそよその浮雲

面影もとめてハ袖やとるまき月
とゝまりて人喪、影ハのこりてまと
櫻井狗之宮經
恋しかるなをさへやこゝろにかゝるらん
うきましかハゝやかの月影
右衛門督通光
いく秋をくるまに変る有明もつれきぬ
契ましゝ中ハよそのむら雲
右衛門督通具
とこなと契まし言ハ夢なるらん
忍ひよハ何よる有明の月
有家朝臣
わすれしといひしはかりのまちよとて
人乃夜かならはめかるまきかれ
題しらす
攝政太政大臣
思ひきよわかれし月よりいつまて
まてとちきりし中やいかならん
家隆朝臣
見し人ふるとはなれのいつも
みし夜かはらぬ有明の月

法眼宗円

すみまさる雲ゐにもつきぬをしかすまたやしなる夏の夜の月

前中納言為藤

人からはたのめぬ月はかくるまてそむかしいはすきやきまゝに宿

いはむ事を　後西園寺入道前太政大臣

有明の月の松の院まて月あひ恋と

わくかたもなき待よひも更なるさやは更ゆく影の月

左中将

こぬ人をまつとはなくてまつよひの更ゆく空の月もうらめし

前大納言

松によしたちまちもしへ人はつれなくて袖の涙にまよふけ行月影

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

あるしなきやとの月もすさましさ

まつとせしまゝに庭のよもきふ

經房卿家歌合に久恋を

二條院讃岐

跡たえて浅茅かすゑになりにけり
たのめし宿の庭のしら露

摂政太政大臣家百首歌合に
[illegible]　寂蓮法師

こぬ人を思ひたえたる庭のおもの
蓬かすゑそまつにまされる

題しらす　殷富門院大輔

[illegible]袖のうへの[illegible]

[illegible]のことは

[illegible]朝臣

[illegible]

[illegible]庭の[illegible]

法橋[illegible]

[illegible]庭[illegible]

[illegible]

摂政太政大臣家歌合に

定家朝臣

[illegible]

ねぬよの衣ハ一床乃霜むすひちくむしん
家隆朝臣
風小の八峯よりつきせんまろそくかゝれ小
あられしなゆめゆくらむこゝろもあらん
百首歌奉りし時
摂政太政大臣
いはもるまきとこに花さきぬれは雲
月の色てこそにほへとは
千五百番歌合に
家隆朝臣

おもひゐるたのめのことの末たのみん
ゆたりの雲ちかとしるし風
二條院讃岐まくはこそのやゝるゝ
刑部卿範兼
わすれなん人のへにゝつきとまもれハ
さくらよしくし雲もかゝれ
題しらず
殷富門院大輔
花もまたわかれん春ハ思ひ出よ
さきちるたひのこゝろつくしを
西行法師

すまくなりにし人のもとへつかはし侍りける
きゝしまゝにきゝつめぬ枕もおもはしは
ともしつくれぬおもひ出のと契りしかは
わすれんとそ思ひけるかな
建仁元年三月尽に遇不逢恋
こひのこゝろを　土御門内大臣
あふとみてことそともなくあけぬなり
はかなの夢のわすれかたみや
権中納言公経
あはれなる心のやみのゆかりとも
見し夜の夢をたれかさためん
右衛門督通具
契きやあかぬわかれに露をきし
暁はかりのかたみなれとは
寂蓮法師
うらみわひまたしいまはの身なれとも
思ひなれにしゆふくれの空
宜秋門院丹後
わすれしのことのはいかになりにけん
たのめしくれは秋風そふく

家に百首歌の會し侍りけるに
摂政太政大臣

思ふ事はらちめる人もとひもあはれしらまし
吹たよとゝめ庭の秋風

有家朝臣

をこつてたよ[illegible]み人無と思ふ頃[illegible]
本のまつりに秋風そ吹

[illegible]
いよいよいはれし雄鹿の[illegible]
身かりしも風のゆく夜[illegible]

西行法師

おしなへて物をおもはぬ人にさへ心をつくる
秋の初風

入道前関白太政大臣家百首の會に
俊成卿

あはれいかに草葉の露のこほるらん
秋風立ぬ宮城のゝ原

百首哥に
式子内親王

今いまて秋はかすむも乃秋
とつてそうはらすおもふ荻はと上風

新古今集　摂政太政大臣

いつもきくものとや人のおもふらん
こぬ夕くれの松風のこゑ

前大僧正慈円

心あらハふかすもあらなん宵〳〵に
人まつ宿の庭の松風

寂蓮法師

里ハあれぬむなしき床のあたりまて
身ハならハしの秋風そふく

水無瀬恋十五首歌合に

太上天皇

里ハあれぬ尾上乃宮のおのつから
待こしよひもむかしなりけり

有家朝臣

物おもハてたゝ大かたの露にたに
ぬるれハぬるゝ秋のたもとを

雅経

草枕むすひさためんかたしらす
ならハぬ野への夢の通路

和歌所歌合に深山恋といふ事を

と成
家隆卿
よしさらはなほとはぬ秋のはなゝらし
雲吹風もつれなかるらん
藤原秀能
思ひ入山の紀仙のたよりまても
ありしいつか神ともしらすきしかたのそら
影さへほ
鴨長明
あめのそらもなとおもへおほしこゝろのそれ
ふくとさはいてゝ梅かゝ夕くれ
千五百番歌合に

右衛門督通具
あらし葉ちりてまた秋にもなりしかの
ならの葉はもるとおもひかねてのそら
宮内卿
深山にはぬれし人は春の色も
みちとこゝろもまちしるらん
摂政太政大臣家五首の会に
寂蓮法師
こぬ人をはちかきよかよふやまのはの月
恨みよりまさるおもひのしらぬ

恋乃歌とてよみ侍りける　　前大僧正慈円

我恋ハ庭のむら萩うらかれて
人をも身をも秋乃夕くれ

被忘恋乃こゝろを　　　太上天皇

袖乃露もあらぬ色にそきえかへる
うつれハかはるなけきせしまに

定家朝臣

むせふともしらしな心かはら屋に
我のミけたぬ下乃煙ハ

家隆朝臣

さてもさはふかゝる袖はよはのよそに
あさのほとはかなくとたのむ秋風

皇太后宮大夫俊成女

露はらふねさめハ秋乃昔にて
見はてぬ夢にのこる面影

摂政太政大臣家百首歌合に尋
恋　　　前大僧正慈円

心こそゆくへもしらね三輪の山

梅乃香にむかしをとへは春乃月
こたへぬかけそ袖にうつれり
式子内親王
さむしろや(?)まつ(?)よ(?)の月ハ[illegible]
かけの明(?)の(?)[illegible]
ゆめ(?)[illegible]人ハつれなし(?)
このね(?)ふ花(?)をとてつくつゝ
暁乃こゝろを(?)
皇太后宮大夫俊成
あかつきのなこりやつらきかねの
袖におちくるかねの音(?)哉
千五百番歌合に
権中納言公経
つくしともおもひあへぬ乃(?)[illegible]
波(?)おもひくらしてうき人(?)や
宮内少輔(?)
[illegible]つゝおもふ心[illegible]
しられぬは(?)たゝふかき(?)
水無瀬恋十五首歌合
今(?)[illegible]

新勅

ちる人の面影とめよ清見かた
袖ぬれしと思ふ涙の外

皇太后宮大夫俊成女

梅かゝをみすの外にゆるさ
しらぬものをとそのかけ
かはりにも春のころしらぬ
あとふかき
しも来

むすほゝれつゝ

新古今和歌集巻第十五

恋哥五

水無瀬恋十五首歌合に

前中納言定家

白妙の袖のわかれに露おちて
身にしむ色の秋風そふく

藤原家隆朝臣

思ひいる身は深草の秋の露
たのめし末や木からしの風

前大僧正慈円

野辺の露は色もなくてやこほれつる
袖より過る荻のうは風

題しらす　左近中将公衡

逢ふ事はかた野の里のさゝの庵
しのゝ葉末にあれしとはゆめ

右衛門督通具

秋へぬる尾花かもとのおもひ草
さらにけしき野辺の露はかれなむ

家に恋十首歌よみ侍りける時

権中納言俊忠

夜乃まゝも手枕さしも乃露乃
いのちしのへとたえめもくらん
親王　三位卿
あふことをおもひしともみなよりハ
あはすさやぬ袖はりの千鳥
藤原元真
おもしくはしけも千鳥と消らん
きえふつきここともぬ
宮けて侍る女　はゝなうぬを
いまさらはひかれハ我よりうつろう

和泉式部
とこ夏にふことに葉しのまよ
まよふしなはなみをとくもん
為みめいふ事あとゝふく侭
ふ女はえしみそとれて作つ
名を事よ　藤原長能
あることりとくよきく秋の乃きのとき
そこあとこ為や人乃とふらん
藤原惟成よ　ものゝしらあは
清忠とし次

うちの人ていやは秋のゝ露殿の
こ菊に下葉多く出しあは
色し　　為本作成
菊の葉やなほの色まし
もとわかるゝかおもかはらぬ
題しらず　　花山僧正の
よもひとしきりかへるを
あさの千鳥よむもほとゝ
あくきりぬ人よ
是貞親王家歌

君のさぬ秋の枕は草なりや
ふるさとの千鳥落しくるせく
涙色て　よかくし
千鳥はのはとくれ袖はたのもよ
あさくの川ぬ涙流せあらは
男ちるぬ家なるよ侍りける女よ
九月のつごもりのしりなれ
源当時
おもひやるよそのむらくも時雨つゝ
あとらぬ　ちしつよ　紅葉さへらん

思ふ事侍りける秋の夜ふけて
ひとりなかめてよみ侍りける

六條右大臣室

なかめつゝ事ありかほにあかしつる
なにゝはかなく思ひしのとも

題しらす

相模

冬のりる萩の下葉をみるにつけ
人のこゝろは秋しらるゝ

源重之

青てもくぬよふるまわね
いつとなくこのよのみしかけるよ

謙徳公

人しれぬねさめの涙ふりみちて
さもしくれつる夜はの空かな

光孝天皇御哥

ぬれつゝそしひていつる雲の哥

あきのよのあはれはたれもしるものを

坂上是則

枕乃ミうくと思ひし涙川
とハわかみこそしつむなりけれ

讀人しらす

おもほえず袖にみなとのさはくかな
もろこし舟のよりしはかりに
妹の袖わかれし日より白妙の衣
かたしき恋つゝそぬる
おなし事いなをゝ乃下草ゆへふれて
まつこはなるてつまつまに
浦まくらほかのつまをまちかねつや
よしやくいわ風はなくとも
わすれなんとおもふこゝろのうき
あまりしわかれまし乃かなしさ

うきなかさ人をいはゝしらぬら
わりなくこそなかりつれいかに
命をはあかなくもあらぬと思ふ
つらきいのたのみなるゝもおろか
ゆかしけにねてもくらさん在井
なのあはれハいつくつれ
とまそまよひしめし人のいまは帰
恋のこゝろくと乃へめかれは
玉水のさよひともえかけぬつき
わなくは石かけしたのきし

山桜は花の色をかくしてよくとて
もしのひとつもなくよりわかれ
春
天のあまの原ふりさけみれは春日なる
雲の中につきてこそ海山とも
やまとのことはをいにしへより
花のいろもありけるをきくかな
雲はあまのなかにもとおくへ
おもへともかくてこそめつる
なかにもあしのなかの山の
新しく開けるをもさけるにや

あしひきの山とりのをのしたりをの
なかなかし夜をひとりかもねむ

人麿

なにはかたみしかきあしのふしのまも
わすれすも思ふ妹かいへのあたり
夏草はしけりにけりなたまほこの
みちゆき人もむすひけるかな

伊勢

清撰にとまるたえ小河の川風は
いかにまたれ しらまたなし

うらみつゝねる夜の袖のかわかぬは
枕の下にしほやみつらん
法[illegible]源[illegible]

中納言家持につかはしける　山口女王

あしへよりみちくるしほのいやましに
思ふか君をわすれかねつる

[illegible]
[illegible]思ひ[illegible]世[illegible]

題不知　赤染衛門

[illegible]
夢[illegible]思ひ

[illegible]
[illegible]

伊勢

春の夜の夢のうきはしとたえして
峯にわかるゝよこ雲の空
思ひ[illegible]人[illegible]

國明朝臣

春の夜[illegible]

かくしつゝあるはたのまん
女御徽子女王
ねる夢にうつゝのうさもわすられて
思ひなくさむほとそはかなき
春日使女[illegible]錦
つゝ[illegible]
能宣朝臣
かくしつゝゆふへの雲となりもせは
あはれかけても誰かしのはん
[illegible]
道信朝臣
涙川[illegible]

[illegible]
百首歌奉りし時
家隆朝臣
あふ[illegible]
[illegible]
題しらす
[illegible]
あはれ[illegible]
[illegible]
千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
和哥所の歌合に逢不遇恋の心を
皇太后宮大夫俊成
夢かとよ見し面影も契りしも
わすれすなからうつゝならねは
しのひ歌とて
式子内親王
さりともとまちし月日そうつりゆく
心の花の色にまかせて
弁
わするなよ世々の契をすかはらや
ふしみのさとのありあけのそら
崇徳院に百首歌たてまつりける時
恋の歌
皇太后宮大夫俊成
思ひ侘見し面影はさてをきて
恋せさりけんをりそ恋しき

題しらず　相模

なましかれしたる名はうしとなほふ

ともめぬ袖はあまきとも

おとこの心ともしく聞つまじとかはる

かはりやとも侍りけるをはかる

一宮紀伊

ほうの雅ハ逢ておもとハ定をさそ

うへてハさなとつらく侍るなる

昔見ける人此比のまつまでも此頃牙

風まかせてなん侍りまかりける

まつひて侍りけれハ

君しのふれやそらのかよひてくるまたん

道すしへ袋のつりすまつて

さぶらふ侍りける女のくるまとてまゐ

らせてきまつりまいりけるにつかはしける

菅原仲文

花さくのねくらまぎれの松人は

かりなかれくきよ思ひいつらん

久しくまとせぬ人に

大納言経信母

ありつゝもさてハあるへきと思ふまに
ほとなく人はとひにけるかな
忠盛卿下のまへしくよ候て御つかいの思ふ
うれしくもおもひさわかれ事をこそ
くやしさをいそきしかハなるゝを
菅井物言教盛母
なさけある人のとハぬもつらくして
くもりきりまよふ袖ハぬれぬれ
影しほ
皇嘉門院尾張
なけのしあらそへハ人よりかゝる

すゑなかしのむくいなかなるを
和泉式部
あすりのていのちの二の世よりほかのおもひ
さつしもあはむかしいはとらるへきな
深養父
みしくハロすまことにしもあらねは
つきなるの花都の人なれハなる
素性法師
冬道事かのうちとさきなほしもえさかん
人いさ梅とともなくてさかれん

小野小町

あ[illegible]らあはれやわ[illegible]と乃こたとふれ
とゐへき人なくわすれ[illegible]わ

能宣朝臣

のうまやくめわまでは[illegible]乃
絶えし井とゐ[illegible]やそ[illegible]ん

祭主輔親

とゐとそ思ふ絶え[illegible]井なる
小ゆたまきハ[illegible]そ[illegible]ん

伊勢

思ひやこ乃ことを山はやしの松
ちらきりのことハいつもこ[illegible]

[illegible]年郎

出そめぬるあともなきいはまのねぬ
たの国はとゝはいはまの年
梅も色香をとめてことゝとの袖にとまる
そゆわのは人いつ[illegible]ぬ

[illegible]女御

[illegible]よつ[illegible]

天暦御時の

あはれ乃京ちこともちらぬ大[illegible]

おほつかなきことのかたはしつゝみけり
清輔　　[illegible]子なと
たちまちくらん心をこそよみつらね
よく歌をよみしかとやかれけり
[illegible]　[illegible]法師
あはれにてかなしかりけりあはれなる
よそめのことは[illegible]まさりてみえする
女乃ほのかにするとやすらふ
[illegible]ハ[illegible]
おもひ[illegible]る[illegible]よし[illegible]

いそくろうことをさせやかきなし
歌しく次　[illegible]
雲井にたちかゝりけるけしき
程ほのかの明ける[illegible]ける
[illegible]更[illegible]え[illegible]てまつるよ
こゝろをかくる　[illegible]法師云
雲井なれはつるよりそくる[illegible]
なとのハ人はきつきしとぬ
[illegible]宮女[illegible]のわかれそ之
し[illegible]つ[illegible]とこそはへ

天暦御製
まねきこそ松まつこそやは思ひけれん
尾のうへの八千とせまつしものとは
題しらず　　西宮左大臣
世の中に人つねなくなることゝもして
雲井にたえて八千つるよろつよ
天暦の此内にて歌(?)侍る人々に文
の寄(?)せ侍りつる
たてまつりて　　菅原輔成
ふりはへて(?)もろこしひとつかね
いふのはるけみけてたまはん

たいしらす　　藤原元真
住よしの岸にますも草なつかしき
あはれよもあへもれぬもしのはしき
天暦御製
みのうへのつらさはなきまつしおもはゝ
物かたらはしうたてこそ絶えさは
久しくぬまてる人のもとに
謙徳公
あはれよな花つきぬ嶺に絶えさは
なかはしき命をとへてもおしからん

題しらす　権中納言敦忠

かなしきはゆめのやとるをかるはいきもそて
たのめし契つゐえぬ世は

藤原元真

よそなからおもひし人のつまよりもこのつらさかなし
逢てのちまさる思ひは思はるゝ
思ひかけは女のかよひやすらん
こと[illegible]れは

参議篁

ひとるはのいのちなれやは世中に
いとふる[illegible]は残のこさまし

題不知　藤原伊成

人をのみおもふなるはいかにせむ
よしやとくかくしつゝをきのまま

讀人しらす

恋しきはおなしこゝろにあらねとも
[illegible]わかれのゆふくれに
いまよりはあらしとすれやしらまなの
わかれのつゆとなりなまし
さりともけふあすをしもたのまれん
こゝろもなくさめて独かもねん

よろつよにまてとかはつりてまさる道あるか
草葉のいはの色にのうつりまさく
秋の田はいまもむかし風のふきかはらす
露はおもふつきせぬ花ものかた
若葉のつゆのこころそ
おもひかもかはりまさるらめん
大空の松はつくしあはれなり
しつえにもみとりの色まさるかな
しはいたつらにくもとまさるの
しのふもあはれめかつゆと思ふ

こしてかはるふとの浦かせの
しけくさのくまの
おなしのつまき
書

新古今和歌集巻第十六

雑歌上

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ
侍ける時立春の心を

皇太后宮大夫俊成

とし暮し涙のつらゝとけにけり
苔の袖にも春や立らん

摂政太政大臣家にて残雪といふ
こゝろをよみ侍ける

藤原有家朝臣

山陰やさらてハ庭にあともなし
春そきにける雪のむら消

圓融院位さり給て後船岡に
子日し給けるにまいりて翌日
つかはしける

一条左大臣

あはれなりむかしの人を思ふにハ
きのふの野辺に御幸せましや

御返し

圓融院法皇

ひきかへて野辺のけしきハ見えしかと
むかしをこふる松ハなかりき

月乃おもしろく侍りける夜梅をみて
たまはりける
まくらはかせもとめけるわ　大納言経信
もろともにかよひける月やとのもりに
春るを
若ふのゝこゝろみてかひのまゝよみける　菅贈太政大臣
雪のうちつもれるしくいり乃あすり
梅
かゝる雪にまよひとまつかふあふき
ふくいよ乃いやもこそ志乃はん

枇杷左大臣乃大臣になりて侍りけるよ
ろこひにとて梅をおるとて　貞信公
をそくとくつゐに咲ける梅花
たかうへをきし種にかあるらん
延喜乃御時かはらけとりて立侍る人ゝ侍りて
かゝるを侍る　藤原兼輔
年ふれは文のへよりもあかぬ年
むも月に清あふひ侍りける梅を
たゝあるまゝに人侍りけるをかくのみ

源□□卿

もゝしきのうちのはなゝれは梅はなも
あかすそのをとるはかりはにほひけれ
梅もちを見すして

花山院御製

色香をは思ひもいれす梅の花
つねならぬよによそへてそみる

上東門院侍従をとりよせける
まへの庭の梅を見侍りて

大弐三位

むかしにほふはなのかうかは人の
ことゝとはむ花の色をもかはる香をも

東三条院女房清少納言おもひける時

梅花みるほとをあたにちりつゝ
ことしもかゝりくるまのゆくへ

東三条入道摂政太政大臣

春霞たなひくはるのよのつきは
みるからにうつりやすきをかは

清慎公

[illegible]

むらさきのくものうへにもやかてうつる

たなひく山のかひはありとも
柳を　菅贈太政大臣
道のへのくちきの柳はるくれは
あはれむかしとしのはれそする
款冬を　源兼文
よりかへしよしのゝ河のきしのやまふき
そこのかけさへうつろひにけり
桃一の院にておもしろきさくらの花
のさかりなる桜をおりてつかはすとて
つかはしける
参議篁
遣しけるかへりことに人のもとにつかはしける
華をさかりにてをりてさや
侍りて　紀友光
あかなくにおもやをしもかんと桜
あまりにかかはしはをとらへて
こゝろにまかせつ花のをさよ
かたるかな　眠後
長閑さをかるまゝにひかるる宿や
ほのほのにかへて華さかりなる
らん　二條関白内大臣

枝ことの末まてにほふ花なれはや
ちるにも心のなかれぬとみる哉
千歳つのまゝにて年之下に流る
ほとへて乃おのこしも　大臣兼実
まつ風のまつものひさしく流る
方　兼実卿下
春そ縁にみゆるよしあるもの乃流
花わかれ何なともへとやかなふ
寛喜三年の桜は鞠のこのまゝ之
しら浪のしらたゝ女にもなのまゝ風
よそみせらるゝやほりのゝかせこ
もみちはのことも末のあとよ
うつろふとも時雨のまゝにや
の流れはあきのにしくらか
春来ては立わかれる雪をしも思
出つ流れ流るる　藤原雅経卿下
列つの川のなのかちの寺さととも
なとしし川花のかの下流
建久六年正月大臣家にて花の下にて年乃
けふの御幸のはなの桜ことの月なわ

くもゐまでたちのぼるなる桜かなさかりはてゝも
はるのよる　よみ人しらず
ありとおもはゞいくよのかぜそふかん
ゆふやみにたれかしるへきよるのほど
おもひやるそでのみぬるゝなみだかな
太皇后宮の女房よりかくかへし
いはれぬをてらすこゝろのしるべかな
源師光
はるやまの月はかくれてもなほ
花はちるともしらぬかた
敦忠卿女大納言公
はるの白川はいはまてよりかゝれ　文の日
なこりのこゝろのみしらずつきのよ
つれなくもおもふかな
和泉式部
おなしく人のおもはぬなるをあるまじきに
みつかのはいもとの香そふ
藤原公光
なにもなくぬれてもしばしをもふかた
むかしの文もかよはぬ
たのまるゝにかはるやしらぬ年

京極前太政大臣家に白河院御幸ありて
又の日花の歌奉らせけるに
よみ侍りける

堀河右大臣

老にけるさゝらもしらぬ身ともをみ
けふのこゝろはよし雪とみゆらむ

長谷京極院歌合時侍りて殿上
桜花といふ事をおのこともに
よませ侍りける

大納言忠家

桜華あかすかへるものゝつねなくて
ちらぬをなとかしられさるらむ

大納言経信

さくらはなおもふものかは雲のよよ
ちるとしもえぬにはあらてつゝ

堂風散花といふ事をよみける

大納言忠教

ときはなるもちりぬる花のちるや
風のをとぬ世もさうかはん

為房殿にて花のちるを見て

清滝て又後三条内大臣ハよく海の見

かゝる　　　　　大納言俊清乃

おしめとも常なるぬよの道のなかれし

とハこの事としらすもとめん

在ちをゆかりきえて後百年のかたみに

うつるはなの花乃あだなりけ

皇太后宮大夫俊成

とハ家よし雄かたらの朝をとよ

かれぬるをとしものへうちかれ

入道前関白太政大臣

春くれハなをこの事よりもなをしれ

ゆつのいかにかせん花をちらさぬき

おもひ家の百首の歌

よふ月も雲のまよりもれ出る

花の名をしりなめの見るまつもあ

まちかね太夫にしたれ人よりかゝる

前大僧正慈円

思ひやるなつのよのつきりを見も

ふかしかや浦いつかきかえ

影にて浪

業平の白川花はちるともあらしかは
あつめてくるまふうしめかたや
西行法師
在京思ひなすへてちりもせは
多く花よそしもいつちのかせん
東山の花の雨の里にとも追
の能ところひかるとそらし事
まそとしもまそや流のうかふ
安法法師
身はとめつ心はいくふいちもかう

風のたよりの思ひおこそう
歌しらす　後頼卿下
桜ちるあちこちはうち岐之の人を
みきとともあつ氏にうすけれは
鶴の仲郷下の氏よの来るあくまに侍る
河辺あまる流のふしかう井は
初鶯き雨つ
さくらのことなりんまつはら松六
海とやなかつね来よの月
おほろの影ふきさんなけいくみ

春雨のふるのゝ月　旅ねまさり
題不知　法印幸清
よそにのみあはれとおもひし[illegible]
梅の花にほひをうつす[illegible]
百首哥奉りし時
前大納言忠良
おほかたの春にしられぬ[illegible]
小田のつちのかはらぬ[illegible]
千五百番哥合に
有家朝臣

春雨のあまねき御代をたのむかな霜にかれゆく
草葉もらすな
崇徳院に百首哥奉りける時
春をまつ[illegible]
入道前太政大臣
すみれさく[illegible]
[illegible]
皇太后宮大夫俊成
[illegible]
題しらず
冬の花を[illegible]

うへよりなかくし給て侍りけれは

貞信公御下

菅原のもみちの色やまさりけん

あらしのへにおもひやるかな

清原元輔

九重まてあそひつかうまつりしか

いりぬるをさへをしみし人なりし

五十そこそのころの時

前大僧正道忠

まのなきなこよかの夜まて見むとこそおもひしか

はなくたにおしみへしの春や

春をまつ乃くれ後の月ひとつ見む

後冷泉院と申しける時

乃せ給へとて

後京極摂政太政大臣

かくまてはもとめぬへきよ

われならてはしらせぬをきみ

上東門院

清原元輔

そひあさちのまつのつゆの春乃夜

さもなきかりそめのかたみになるへき

卯月祭の日まて花ちりのこれる年
侍りける年その花を使少将のかさしに
のたまはすとて葉にかきつけ侍
侍りける　紫式部
神代にはありもやしけむさくら花
けふのかさしにおれるためしは
むかし思ひ出て
式部内親王
[illegible]
[illegible]

[illegible]中納言[illegible]侍りける時祭の
[illegible]
[illegible]暁[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]道
[illegible]
[illegible]
[illegible]月[illegible]

さき郭公乃こゝにはなきそ梅乃花
よそへて人乃まねかれけるらむ
まそこの流のまちまちと待くまし
たれに　　三條院女蔵人左近
梅の花よおもふらん人よりほとゝきす
たちはなのあやめもなきてかへりき
五月雨ハの里ぬし人まぬかるゝ道
こゝろうきものをあやめ乃咲
いまは　　小侍
郭公こゑまつほとは人まちしよりは

こゑぬるらんこゝろもきむかし
たえてゆく袖乃ぬれて見る月あかく
ゆかりに　　藤原家経
五月雨にしつくさまかたる月影
海にあめいよいよ流れて
遠藤百足の山の井の月影さ
　　　　皇太后宮大夫俊成
とふ人もなき我思乃あさき
あやめまで何事もかねて袖かな
郭公　　花山院御歌

いとまめやかなるとも夜なくく
あすもこそいひてよめのかへりなむ
贈皇太后宮にそひて春宮にさふらひける
時少将義孝ひさしくまいらさりけるに
なてしこの花を
たてまつりける
恵子女王
よそへつゝみれと露たになくさます
いかにかすへきなてしこのはな
月あかく侍りける夜人のほたるをつゝみて
見えつるほたるのまたなきに雨の降侍
かくまよふやとはつゆかる　紫式部
思ひやれあはれなるよのつれなきは
見えしやいかなるをわかるゝ
題しらす　七條大納言
おもひあまりあはれなる秋のよのあけゆくと
秋のしめやはすくとも
風よわゆるきおもひそめける
中務

袖乃浦よ波かけく旅に見よ
雲ゐにくもまて涼しかるらん
黒年むかしの紫葉流かゝりて侍
はるかなる
紀貫常部下
秋やくる夜もやまふと思ひまて
あらい海は波すくかりける
あやくもわ遠(?)ともちらは侍て
おく人のさは路くしあはなれ
ほいつまて七月古のは月さま
さかりて絹を侍られい

紫式部
めくりあひて見しやそれともわかぬまに
雲かくれにし夜半の月かな
又こゝに宮にかゝる時の独言業
縁理をは別つかはすかるを
なさけなきは人をと浦はせくら
なかれまちとを活ひて
三條院御哥
自詠乃いにはゐゝくは暇い
すみなきしき世をとそかや添ん

題しらす　　　藤原為時

山のはを出かてにする月まつと
ねぬ夜いたくも更にけるかな

参議正光おほろ月夜に忍ひて
人のもとにまかりけるを
見あらはしてつかはしける　　伊勢大輔

うき雲はたちかくせともひまもりて
空ゆく月のみえもしぬるかな

返し　　　参議正光

うき雲にかくれてとこそ思ひしか
ねたくも月のひまもりにける

三井寺にまかりて日比侍けるに人々
とふらひまうてきてかへりなんとしけれは
侍りける　　前律師慶暹

月見てはみやこのそらそ思ひやる
けふ山のはを出しつきかけ

山里にこもりゐて侍りけるに人
とひて侍りけれは

法印静賢

思ひ出も人もありし山の端に
住るとも見えし有明の月

八月十五夜和歌所にてをのこども
歌よみ侍りしに
民部卿範光

和哥の浦に家の風こそなけれとも
浪ふく色は月にみえけり

和歌所の会に湖上月明といふ事を
宜秋門院丹後

夜もすから浦こく舟は跡もなし
月そのこれる志賀のからさき

題しらす
有家朝臣

うき身よにおもひもいれし世中は
とてもかくてもあきの夜の月

永治元年譲位ちかくなりて夜もすから
月をみてよみ侍りける
皇太后宮大夫俊成

忘れしよ忘るとたにいひてまし
雲井の月の心ありせは

崇徳院に百首哥たてまつりける

あはれてゝ袖はむかしのつゆやとるらん
雲井の月は猶こそまさ
文治のころほひ百首の歌よみ侍る
くまなよ懐旧歌とてよみ侍ける

右大将公衛

ゆくすゑはむかしになるのよなれは
こよひをもわすれし雲井の人の月

百首歌奉りし時秋歌

二条院讃岐

むかし見し雲井をめくる秋の月
いまいくとせか袖にやとさん
月前懐旧といへることをよめる

藤原経通朝臣

忍ふれと世にあるものにいかならん思ひ出よ
たれもとはぬにきくるは明けの月
不忍まほりて待て月をなかめ
のこれるかな

藤原長秀

あらましも人やむかしのしのふらん
こよひまくまなき秋の月
寄月懐旧

入道

おもしろきこよひとなかめつゝ月を
ちらぬはなにこゝろはとめてしものよ
月はみなつきのよそにやあはれなる
ゆくへ人の心はゆれは月をみるや
とふひとまつくれはふゆのよの

源通親

ひとつよもまてはなのさとにもあはぬよ
君のこゝろや秋の月はいたくもあはれ
更にくるまてもなほ月はをしけれ
月はなほよそのよをもいそかぬ

讃岐法師

天の原そらのはしゆくまにまに
秋の月の出よりなかめつゝな
雖宮貌やまとの山にのこる
ちらくはなる女はもとの夜を
ゆめまてもあつきまちかるゝとて
待られは

後人しの
たれかあらし人をまつちの山風よ
さく夜半のはなものこりまちかる
百よさのまくまつしとも紀

摂政太政大臣

月見はといひしはかりの人はこて
まきの戸たたく庭の松風

五十首哥たてまつりしに
月のうたとて　前大僧正慈円

山里に月は見るやと人はこす
そらゆく風そこのはをもとふ

摂政太政大臣大将に侍りける時月哥
五十首よませ侍けるに

天の原月はかはらてゆくへしらぬ
野やしけるのにはきくへのわか庭

月前よませ給ける哥合に山月の心を

藤原業清

山の端を出ても松の木の間より
心つくしの有明の月

和哥所の哥合に深山暁月といふ
ことを

鴨長明

夜もすからひとりみ山の槙の葉に
くもるもすめる有明の月

熊野にまうてし時夜ふけて

左京秀能

おく山の嶺はくものかゝる嵐よ
ふかくとのは雲よりいつる
月もさやかにもみちの雲ゐの
こやまの谷のきしやかに
山の端の夕日のかけは

猷円法師

秋風ね吹はあさ日の明ゆく
山のは霞ちりて月影
影しらぬ

花山院御製

あかつきの月みんとしも思はねと
見し人ゆゑになかめられつゝ

伊勢大輔

有明は月はかりこそかよひけれ
くる人なしのやとの庭にも

和泉式部

すみなれし人影もせぬわかやとに
ありあけの月のいくよともなく
高くそ月照水とはいつもなか
人こゝろみに偽るそてし

大納言経信

もとむ人もあれなるこなすきのけ宿なりし
芦のやに月はもりてゆく世を
秋の夜もよ屋まてひとりつゝ来

世をそむきての後侍りける又の年
の九月十三夜月くまなく侍りけるに
よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

思ひきやわかれし秋にめくりあひて
またもこの世の月を見んとは

題しらず

西行法師

月を見て心うかれしいにしへの
秋にもさらにめくりあひぬる
夜もすから月こそ袖にやとりけれ
むかしの秋をおもひいつれは
月の色に心を清くそめましや
都をいてぬわか身なりせは
すつとならはうき世をいとふしるしあらん
我には曇れ秋の夜の月
ふけにける我身のかけを思ふまに

たえまもの月乃かげのさやけくわ

入道親王覚性

あかつきて過ゆく秋を思ふまに
袖にも月をやどしつるかな

藤原定経

鵜かひせし夜乃月かけにさやかなる
うきこそしられぬをりにもあるかな

五十首歌の中に

前大僧正慈円

秋をへて月をながむる身となれは

いろもかはやこそとまらね

百首の歌に

藤原隆信朝臣

ゆくさきもむかしの妹はすまふれと
おもへいかなる山の端の月

題しらす

源光行

いつまでか人のこころぞ月をみて
あはれをしらぬ思ひなるらん

千五百番歌合に

二条院讃岐

身のうさに月やあらぬとなかむれと
むかしなからは影そもりくる
左ちかうきんとしさりしかは月
とあんそ濃ふ　宮内卿
有明は月よりほかにみるものは
らはのはなとと楽しまるへき
山里こそ月は夜をたのむ思ふと
つきぬ心ちさようなりけり
大納言
すむあはれあきのよふけてむかしをや
ほそくわれを人のなけきを
色月のなきかはらのはしもをかけて
ゆ秋をまつよりせつなるける
作明親王
かもしやさなふとまつよしなき
うきにおもはすねてみつかの月
式子内親王
色て
さ明はおもはすなりぬのめいまももと人
秋はさかも秋落やものそうはく
まり秋の今宵暁月はうれしきに

摂政太政大臣

あまのとをゝしあけかたの雲まより
神代の月のかけそのこれる

右大将忠経

雲をのみつらきものとてあかす夜の
月よこすゑにをちかたの山

藤原保季朝臣

入かたはそよきかしも月はやまのはに
いさよくあくるからはなみたかけ

月あかき夜定家朝臣にあひ侍けるに
哥のみちにこゝろさしふかき
事はいつはかりのことにかとたつね
侍けれはわかく侍し時西行に
久しくあひともなひてきゝならひ
侍しよし申てそのかみ申し事
なとかたり侍て侍てあしたまつ
しける　藤原秀能

たのもしくものへをハ月は雲ゐに
むかしのこゝろをまや夜やかてめさん

題しらす月をを　寂蓮法師

[illegible]ことしも霜の月まつと心
[illegible]とはしるやれ[illegible]すきと
[illegible]よ月をみて
平[illegible]朝臣
[illegible]人は[illegible]
[illegible]もるしらは[illegible]月
[illegible]人は[illegible]
[illegible]人はほのかにすむ
[illegible]あきらけき月の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人は[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]神祇伯[illegible]仲
[illegible]奥まてすむ
[illegible]月[illegible]さやかにて
[illegible]法師
[illegible]
月の[illegible]
[illegible]の今[illegible]月[illegible]
[illegible]大[illegible]
事なき

和歌の浦に月の出しほのさすまゝに
よる鳴鶴のこゑそかなしき
之中納言
心ほそく袖に月のやとるかな
寒夜よわのそらにねさめして海人の
藤原秀能
明石かたいそ枕して人の袖をぬらすな
さしほりし月そやとる袖の
艘よせて行すゑのよ切目
の宿りて海邊眺望といへる心を
うきおりこともつゆまくらかな
源具親
うつりゆくおもかけしるや浪の上の人
月もなつはゝ波のうきねを
名にまおほくあまわたるもちの
うめしらぬ浪のうへ
皇太后宮大夫俊成
志つかなるやとりかな梅のさか
もしほのけふり松かせの
千五百番歌合に

あ秋はつゝゆめにのみこそ[illegible]ましあはれ
ましてこの[illegible]にやとりてまつ[illegible]
題しらず　西行法師
雲のうへに[illegible]とゝこもりける秋とこそ[illegible]
おもひやるたよりのなきに[illegible]
五十首歌人々によませ侍りけるに
述懐の心をよみ侍りける
守覚法親王
風のよくさはりなくともえこそ[illegible]
思ふ日をさめてたのむこゝろしもなく

寄風懐旧といふことを　左衛門督通光
あさぢふや袖にくちにし秋の霜
わすれぬ夢をふく嵐かな
皇太后宮大夫俊成女
葛のはのうらみにかへる夢の世を
わすれかたみの野への秋かせ
題しらず　祝部成仲
[illegible]をたよりにふるき宮城野の
もとあらの小萩[illegible]

法性寺入道前関白太政大臣めされし
ともをあつまりて人のよみ侍り
ける
たちまちしとこのかけにもみちはちるまに
ちとせのうまれけるをしらさるはし
なし　　　　　　　和泉式部
白露はうへはをきてもめつらしく
いかにしりてか色のちかしみす
法性寺入道前摂政太政大臣
題不知　　　　　　曽禰好忠
山里に葛はひかゝる松垣の
ひまなく物そ秋はかなしき
秋のくさまさりぬる花の事を
よみて侍りける
安法法師
もみちせぬ梅の下にもいまきぬ
ひらきの花もあるかと清水をそ
新撰朗詠下律師
ちりつとのしあれ
前中納言匡房
秋くれはうちすてられし山里に

有明はつれなきためしとのみいへり
九月は夏にも秋の中にも云る意
に春にもとれとよみかね
大乱には家
花は花嫁は未亂に風ぬれ
こともものくに床ぬこほるく
山里に住侍る此家もくさあ
しい古井細書影色の中につけ
くもあり　一夜迄老る大下
夜更に明あしまつりそおもゐる

哀ものくや秋の色とについては
色し古井御弁影
在井に比にかつはいやこはも
といおらし立月はこそは家
清涼殿の庭にくはなるかたち
兼もを後とみ後はなと出て
冷泉院殿の
よっはいはかりの山はあまたのせい
山のはよりまの筆は人の年
廿月の比野分に十の露のくるよ

源順

たのもしな野宮人のうふる花
しくるゝ秋にあへすなるとも

影さして　よろつ人しらす
山のはの月の見えけるはこゝにほかまて
はるかなくたくとも峯の松風
一日かこえの声したえぬれ

土御門内大臣

秋とまち人はおほかたのしも
思よりふきこそはかれめ
見まつる人のしこき

最勝四天王院障子におほゐ
川かきたる所

家隆朝臣

君か代はあふきて大井川わたる
いにしへの世のまゝにわ

元輔のもとに人のまうてきて
つかはしける清少納言か物なとかへすとて

ゆくしく浅きほとのつかも
たえすかれて心のはなりけるかな

左近衛

たゝみにけるものあはれなるかな

跡もなく雪ふる里はあれにけり
いつれむかしのかきねなるらん
浦ちかやこかもくさすせれて雪
乃新ま　　後白河院御製[illegible]
霧乃余き見くふましいかくは
いし雪ちとふりゆましやは
雪またせそ[illegible]はそよある
杣山やこすゑにおもる雪をれに
　　　　皇太后宮大夫俊成
たえぬなけきの身をくたくらん

狩人のおもしいま前もさ清
御し三年　　朱雀院御製
とやかへりしはしもこかよせ
わかめしたへ　いとよすれ
狩山後かりまたたかへつくす
乃とし清御名よ三くつかへ
よろしや後くかれ
　　　右大臣公経
ほともなくとくめる薄をかりはや

千代よろつくたえぬ華のにほひかな
御ためし

大殿宣旨
思し夢をいつはとのみと思ふかな
あまをとりすれねとものかたはしにて
たのもし哉

皇后宮大夫俊成
老ぬともまたもあはんとゆくとしに
涙のたまをたむけつるかな

慈覚大師
大かたは過る月日をなかめしは
わか身にとしの
つもるなりけり

新古今和歌集巻第十七

雑歌中

承平五年九月紀伊国よりいしつき
時　　　　　　　　にの海松を

しほはみちかけはゝ松の枝もあら草
いくよまてそくりの年のつもりなん

都まては
　　　　　　　　式部卿の宮歌合

やましなのゝのいそのゝ梅
たつゝやまかのしはいなつ来
　　　　　　　　　　在原業平朝臣

あしのやのなたのしほやきいとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり
はるゝ夜の星か川辺の蛍かも
わかすむかたのあまのたく火か
　　　　　　　　　　読人しらす
しかのあまのしほやく煙風をいたみ
たちはのほらて山にたなひく
　　　　　　　　　　貫之
なにはめの衣ほすとて刈てたく
あしひのけふりたゝぬひはなし

あまの河橋たにかへるらん

忠岑

としふれはくちこそまされ橋柱
むかしなからの名のみのこりて

恵慶法師

まつ(?)の日影なるしつのはま(?)のにて
いつきのことくとたえ(?)ぬ

俊恵法師

くちはてぬ河の瀬のしからみ(?)
さえ落しの葉に松風ぞふく

題しらず

権中納言定頼

鳥は風夜半に吹(?)しきりそ[illegible]
あけ(?)つきのくもにはりひそみ(?)

藤原孝善

まきの海路をかへりゆく(?)
まつのあたりにもあさ(?)しほの(?)

天暦御時屏風に

壬生忠見

秋風の吹(?)にそなひく[illegible]

桜ちる[illegible]
立[illegible]雲のよそにそなりけり
前大僧正慈円
[illegible]
思ひしよりも[illegible]
和歌所にて人々[illegible]梅風といふ事を
[illegible]
人をはゝぬ[illegible]
あれ[illegible]
明石の浦を[illegible]

後嵯峨院
[illegible]
[illegible]
暁[illegible]
寂蓮法師
[illegible]
[illegible]
千五百番歌合に
正三位季能
[illegible]

よりひたるもるらおもふころの松風
御名そあらいかに　参議雅経
ときしもあれほらしとなるめすのせん
なきのきさほやおもふならめ
難波つくは　貫之
きみか代にはしはのはわ
たよらふ波のはいまうるまる年
むすあのかやまよなりてかきかる
ておもほよとのかやのりてかくは
とて　[illegible]子めて

あほよとのらしにたいのへしうはは
松みのうしぬなとをみえまりや
大貳之任としよさよとにたるかれる
きこしめて　後冷泉院御時に
まう人いかなくもすまうに
かすとはとは人おもはとしるる
後冷泉院
大貳三位
はらけもくいつはらとも人ほしく
このとらとせなのいさいて記
教長卿名所のちよせうるる

祝部成仲

うちよする浪のこゑにてしるきかな
吹上の浜のあきのはつ風

百首歌たてまつりける時秋の歌

教長

おほかたの風もとこよなりけりや
あすはすゝしきはかへし秋風

海邊霞といへる心をよめる

中院右大臣

見わたせは霞のうちもかすみけり
煙たなひくしほかまの浦

太神宮にたてまつりし百首の中に
若菜をよめる

皇太后宮大夫俊成

けふとてや磯なつむらん伊勢嶋や
いちしの浦のあまのをとめ子

伊勢太神宮にまうてける時よめる

西行法師

ふかく入て神ちのおくをたつぬれは
またうへもなき峰の松風

題しらず　前大僧正慈円

[illegible]

西行法師

[illegible]

業平[illegible]

[illegible]

題しらず　[illegible]

[illegible]

五十首歌たてまつりし時　前大僧正慈円

[illegible]

西行法師

[illegible]

吉野山やかて出しと思ふ身を
花ちりなはと人やまつらむ

前大僧正慈円

いとひてもなをいとはしき世なりけり
芳野のおくの秋の夕くれ

千五百番歌合に

右衛門督通具

ひとゝせをまち別ふいまこそ枕の夢
よ眼くうつりぬる風はちしの眼

守覚法親王五十首よませ侍りけるに

ふかき家居のこゝろを

有家朝臣

出ぬ世のいとゝおもひ絶てもなほまて
立ぬらてしい風ふうしくも

あるねまて歌合し侍りしに山家嵐

宜秋門院丹後

山さとは世のうきよりも住わひぬ
ことのほかなる峯のあらしに

百首哥の中に(?)奉りし

家隆朝臣

瀧乃音の松は[illegible]もかきたえ[illegible]
うちわたる[illegible]ほと[illegible]夢ハ[illegible]
顕昭法師　寂蓮法師
ことしはや[illegible]
嵐[illegible]の[illegible]
前中納言匡房
あはれ[illegible]
大納言師氏
あし山は[illegible]乃衣[illegible]
いつまでの[illegible]

九
しら[illegible]山風
これは[illegible]風[illegible]　恕覚
後京極殿下太政大臣
みよし[illegible]山里は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　読人しらず
[illegible]
なか[illegible]の里

冬

能宣朝臣

身をしるハ ろうそくしほはけふと思ひて
いかりもうしめて人のいかれん
物のあはれとも侍るもの也けり
冬まだ深き暁のよすからまま侍る
乃至ゆきとけて人もはやしとわたりて
また鳥もよすからまちあけ

重之

若はいとゝまさしきつもりし
入ふゆやまはこれにもまかりて

むらさめの露もまたひぬ
まきの葉に霧たちのほる秋の夕くれ
あはれなるとも千鳥のなくを
思ひつゝ涙 西のそら
山のくまくまにかくれ通ふも
またはやくあつまきによしのに
やまの峯はあけぬいやましや
おしまきて月もありやて
岸をとふとものこしけれ

寂蓮法師

立出るみつまの木かけをこそ思ひ
あまた山陰にとまりかくる哉
後普光園院殿
太上天皇
かくしつゝ世をもちつさしと思ふかな
名をおよはゝ人まちつゝも
百とせの春とそれ
二条院讃岐
あつまにて松君の代はときはかけ
まつとさしまつ小松原かける

家に松といふ事を
皇太后宮大夫俊成
としをへて小松にまかふ松枝
千代まてと君もなかなか思ふかな
春日影まつ松風とふくなる
前関白
家にのこゝろ思ふの梅をとはゝわか
袖にしつらへ庭乃春風
ふるまよ侍りけるとは
道命法師

世をそむくかたとしとのちあるには
梅思ひけりよくいへのほとりの僧
少将井乃尼大原野よりいてたると
きゝてつかはしける
和泉式部
世をそむくかたはいつくもありぬへし
大原山はすみよかりきや
返し
少将井尼
思ふことおほはら山のすみかまは
いとゝなけきのかすをこそつめ

題しらす　西行法師
ふるはたのそはのたつきにゐる鳩の
友よふこゑのすこき夕くれ
とふ人もおもひたえたる山里の
さひしさなくはすみうからまし
殷富門院大輔
のちしおもかけ蓬乃しけきかな
宿とひかねふ秋のたそかれ
は蓬よりはらのこゝに人のまさ
ときおもてなそめさていてよくわよし

秋哥
　　　　慶命法師
いつとても秋は小倉の山のはに
花ぬめと人のいふくらむかゝる
桜台河の梅露むすおほしまうく
ふりし朝になれはつるのつかは
まそ年あまるらん

　　　東宮部卿
隠岐山のそはにかくれしゆゑ
まことなりくるゆくらん月かは
かくかくもりかほ

　　　知足院入道前関白太政大臣
たつ田川のちる秋のもみちはも
ちとせよにそめつくさむらん
冬のきたるにけさ寂く朝霜
つまやかくふ年たちてまた関くる

　　　東三條入道前関白太政大臣
しらなみの
家もともの風にふくもよの暮を涙の
いとゝものなかれなかなか

清尾に
　　　恵慶法師
花のちるよのわくらはをぬれ川のまたあらしにまかせ

おとにのみきゝこし瀧をけふみれは

題しらす　人麿

ものゝふのやそうち河のあしろきに
いさよふなみのゆくへしらすも

布引の瀧見にまかりて

中納言行平

わか世をはけふかあすかとまつかひの
涙のたきといつれたかけむ

京極前太政大臣布引の瀧見に
まかりてよみ侍りける

二条関白内大臣

みな上はいつよりかゝる白雲の
いつはりならぬ布ひきの滝

[illegible]の天王寺の[illegible]より布ひき
の瀧すまうて

有家朝臣

久かたのあまつをとめのなつ衣
雲井にさらす布引の瀧

あまの河原[illegible]くと云布

摂政太政大臣

[illegible]くあまは[illegible]つゝ[illegible]

ほのかなるきりにちりかたハなりけり
影もなし　　藤原家隆朝臣
よし野川のきしのやまふきさきにけらし
みねのさくらハちりはてやしぬらん
堀川院御時百首歌たてまつりける時
前中納言匡房
桜乃枝も萌もしけりてかはつなく
ゆくをへぬるもやまた田のさと櫻
天暦御時屏風によめる　みの
をのへのこそにけりぬるまての
花のさきける

井堤
ちるかたもなし花乃名りよハたてゝそ　花ぞかし
わやくわかれてにほひまさるとも
よしのがは
前大僧正慈円
山家のなかめのはるのあはれさを
よしのやま人乃心つくしに
西行法師
山里ハうき世いとはん友もかな
くやしく過しむかしかたらむ
やまとくとハ人こそ帰とも思ハねと

ゆくりなくも車からとく御行

前大僧正慈円

草乃庵いともしもふるいのちなん
霜乃命はつぎつぎところもの
都出てゝ久しく旅の身とはいへ
まとふへき人とは借りなれは

越野はわかれのふしかもぬる

大僧正行尊

わすられぬはまなかの人の心はいつも
立りあう川にころもほすわかとも

あはしまをかよふ人の越路に
こゝろをかけてはなれぬちきり
かな

寂蓮法師

夜をこめてすくらむ南枕に
菊のはなやさきしらず
西のはなふさ一面のうすかりしに
陽をまちてうつろはぬかな

家隆卿

いつわが苦のたもとはかはくらん
きつゝぬらさぬの月をやかるへき

百とせのとしよりもふるき山嵐ふきて
はなし　式子内親王
たれ家の梅のかほりそ春の夜の
ともしき袖にうつる花の香
小侍従
梅つゝむ山風のあらしよはらはなむ
あをつゆきさきの墨染の袖
梅か枝に吹くる風もかはらぬを
梅かへしみよりいかなる山里の
わかれし人にはとはぬ山かけ
藤原為忠
五十ぢあまりなかめし花の
影なれは今はしのふるあはれもふかき
袖のうへやつれてこそ月
後鳥羽院
ふかくしみし梅のにほひを
つかのまに問はる[illegible]
まよひてはいつかとかくれて
賀茂重保
梅をみてたのしく思ひし
絶えし花はなさけとしらぬ
[illegible]

老後源乃忠なりける山寺にまかりわ
て侍りけるに房乃主庵すみ
ありて出て来るまて侍るほと
物て侍るによみて侍りける

西行法師

尾乃地あすわりのさかりを待
ほとあらしなるらむ
山家あかあらしよみてなる

大僧正慈圓

山里はとひくる人のことゝはん
このゆふくれのいかにやあるらん

後白河院かくれさせ給て百首
歌に

式子内親王

をのこえはなくしてこそかはす
やすらひもたゝぬなきとも

匡房百首歌よみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

いかにせん賤のそのふの奥の竹
かきこもるとも世の中そかし

老乃後むかしを思出侍て

祝部成仲

あくかれハむかしのことのミ思ひ草
葉ふすゑ乃露よ沖ゆしつゝ
影さへ

右大臣道家

思ひ知る人にもとめあきらかにぬ
人いとへほしあきの風ふく

西行法師

ふる畑のそはのたつ木にゐる鳩の
友よふ声のすこき夕くれ
山のかけのかろき思ふそゝき跡路

とこのひまにむかしなゝねく
さゝまなる野をゆく一むらすゝき
ところにちそ毋ひのくをとゝを
世のふ人にしに庭に小柳よ年ふ
嵐にまをてと柳まつきに
三井寺やかそに住なれ
思ふやつまそゝゝえ

大僧正行尊

住ふかれし身ふみてハこのしろや
浦来かたかりて鶴なりし葉

百首哥よみ侍りけるに　摂政太政大臣

故郷はあさちか末になりはてゝ

月にのこれる人の面影

西行法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あれなる宮ゐにハいかなる[illegible]
守覚法親王の[illegible]
侍りけるよ国居乃[illegible]
宣[illegible]
是ハまことに人も昔[illegible]
それよわ庭乃紀ハ[illegible]
[illegible]国[illegible]山人あ
ま[illegible]あへ[illegible]る[illegible]
東[illegible]
あ[illegible]ハ[illegible]
うき世の中よそに絶[illegible]業
歌人 人麿
殊に[illegible]人ニ[illegible]国[illegible]
ち[illegible]
紀金[illegible]や[illegible]九[illegible]
天智天皇[illegible]
あ[illegible]つく[illegible]ハ
たのみ[illegible]

新古今和歌集巻第十八

雑歌下

山　　　　菅贈太政大臣

足曳のこなたかなたに道はあれど
都へいざといふ人ぞなき

日

あまの原あかねさし出る光には
いづれの沼かさえ残るべき

月

月ごとにながると思ひしますかゞみ
にしのうらにもとまらざりけり

雲

山わかれとびゆく雲のかへりくる
かげ見る時はなほたのまれぬ

霧

霧たちててる日のもとは見えずとも
身はまどはれじよるべありやと

雪

花と散り玉と見えつつあざむけば
雪ふる里ぞ夢に見えける

松

花めよそ松はみとりの海をこわかる
千とせのこゝろ乃言の葉をそへしよ

露

落葉もましもむらさきにかゝりけれは
ふきみふのをすね人ゆすぬ

道

あすのやの實もつよきのこゝろのつらい
人もわらくとぬ人へるわ

海

しらぬひのつくしの海のなかまれは
浅きこゝろの月ものこる年
かきくな
唐土乃錦のあひをはつそさま
とをみれはいきとかよひく人

波

なみのれ立ちとゝまりて清なとうら
みつまのしなてるつき乃ひとしなに

影

影きてはもあえ人ししよ
をゝ峰の花しらのをせ乃浅海てば

ちるあまの落葉ゆへのをくの紅葉
さほ山のはゝそのもみちふかきさまにかはりて
あまのかはしらぬいはもとさしてさゝ

千五百番歌合に

摂政太政大臣

くもはれ中そらの月いつくより光そみえける
ひまもなきさくらもしはすをるや

題しらす　前大僧正慈円

ところゝにうつろふ色はちるなれとみたれ
しらまぬ舟さへ流す浪やさゝ

勝覚上人

あまりのさむさにたへぬ心のいろ松のあはれ
ふかいはのもとにすまふやゆくへ

人丸

あし野のとこふしてよはのうたのかたりあはれ
あきのすゝきたはむかせのなわ

能宣朝臣

藻塩のもゆるけふりまきたえぬ松の
しらぬいへはかたをゆくへしらぬうき
かすみ乃松とし事をも浪にこゝろ

頓阿

花よりもなほさきかへのなるかはの
さかりめる南ちをまちはやいかに
山水をむすびてもいてぞしるらる

能因法師

あり山のさとはにしまて春のくれ
まちわびてはへる花をなん
たのめし人を世にもあれ
のかれてそ

法成寺入道前関白太政大臣

なすのれはしもの秋をまかへし

はしもるもをはらへにまちかね
冷泉為家の
ちかくまでこの冷泉院の
はかなくの跡をまたたまへむかし
かなしさ出家の時のことまつふ
とめ

東三條院

いかでかはうちのそれもかなし
しはしめしのいつそたのもしき

冷泉院太政大臣

つねなき世のこゑのかはすもの
あはれそのうきよのゆへはつきなき

上東門院出家の後こかねの装束
したる沈の数珠を白かねの筥に入
て梅の枝につけてたてまつらせける
枇杷皇太后宮
かはるらん衣の色をおもひやる
涙やうらの玉にまかはん
返し
上東門院
まかふらん衣の玉にみたれつゝ
なほまたさめぬ心ちこそすれ
題しらす
和泉式部
しほのまによもの浦々たつぬれと
いまはわか身のいふかひもなし
屏風の絵に塩海の浦すこしあ
侍りけるを
一条院皇后宮
ゆきへのあまや煙となりぬらん
人めもみえぬしほ海のうら
かねこえ横川よりのほりて侍けるに
あかつき侍りてさきをおくりて
つかはしける
天暦御製
雁かねの雲のうへよりおちてや来ぬ

横川にはすさましきよるのあまて
源信　心覚
もしおもひしらるゝ事いてくる
雲林の里の山はすゝしきかな
夜をしのはせし小野とふ所は
侍るよるは業平朝臣のいほり
ふ悔をつくしよろこひをとこそまて
見えし夢もかゝり思ひはしめやと
ようこそ侍るへけれ
惟喬親王
夢のともたまの思ひ出も世にハ

そのまゝとちめたる蘇ことかなしや
京よりは侍るらんと思
なくつきとさらなるへしとてに人て
ふ　女流の涙をぬる
雲井とふ所は吉つかはしき
初もつゝいはけなきや有る年
京を流なるを竹林
いふ人はなかる　何物
さて風はまちて見るも　とも
しつは人嫁はものゝまするを

夜ごとに明まで流して渡りける
菅原清正
あまつ風吹きは浦に見る参議
あまの雲井にかへりてもとうきし
二条院菩提樹院にありしを
後の世に思ひ出して大納言
綾絹きかりて流るる文月日女
宿のうちつかりける
須人しく
かりへつかみつひかるやうさ

我をとはまし見るよりも若下
白楊思はる後の清のまよかる大
臣かぬの流 宮内卿下
あし
まつのとひよりてほしのきよ
顔りかへりつかれのまの孫
宗光法師の千載集すゑこまれつ
つこのみよ星のうへ季を康
流く宮ふとの記あつらてこ
我がうちにまなりつとりのたかえく
流なし
後白河院清女

濱千鳥ふミとゝく跡乃つもりなハ
のこしおかむといふとゝめや八
上東門院に侍りける女房に
何となく侍りける頃賀茂に入ける滝
を見侍りて　源資通朝臣
懸ほそき人のこゝろをみることも
むかしにあらむ心地こそすれ
播磨守通俊　橘成遠之女
思ひやる方なきたくひもありけるを
中をはなれはかゝるあはれそ

あはれ誰も見ぬ木をとゝめつゝて
ほかにちらさて残る見る
周防内侍
消ぬかたに見なす物と思ひける君をなと川
まれにはまたも見えけむ
今の世とたのむを思ひけるに
うきとのみ聞えつゝそ見る
かたらへとも
さらに来ぬ木のしつくにしるそ
むかしの人はあはれなるの時

遊女乃心をしらぬといふことをよめる

藤原為忠朝臣

ひと夜のそこにもしらぬあはぬ雑とも
たのまれはいかにやもしらんか

大江嘉言

しめくなと柱るとく
はるく草ふのさ庭よおすゝめ弥
しくるゝとみへく

寂蓮法師

草のてえあかれ袖のうきつとまよ
えは梅香なりけり

秋のよのつゆのおきゐるたてまて
こゝくとふひかり人をよはれは
しらる

源頼輔

しもつきはいつとさやいはかるかみよ草
世よふかきしのあさかの柱ふくさ
なし

大納言經信

旅風はまきとわかきをかし
おもいはしのふよりうく経またやは
あかれ流よりの涙なるとも知之

左京大夫一条顕輔

しもゆきふる又の日

右大将済時

志のぶ草いかなる露かおきつらん

けさハ根もみなあらハれにけり

左大将朝光

よもすがら[illegible]まつのさまきハ[illegible]

思ひやる[illegible]見せばや

あまりにけりな人のくもゐに[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

あふことも[illegible]おもひぬ[illegible]

ことのはもしんことこそ[illegible]思ふ人

在し　　　小一条院

[illegible]の月のきえてちぬ[illegible]

なくともおもへども[illegible]の下草

[illegible]　　　和泉式部

命をしん[illegible]あるハいつくの[illegible]

志のぶ[illegible]人の[illegible]

[illegible]ぬと[illegible]

[illegible]

て[illegible]れハ　　　大僧正行尊

[illegible]

[illegible]

[illegible]時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]事侍りける[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらす　大伴[illegible]

[illegible]

[illegible]

清原元輔

[illegible]

[illegible]

[illegible]人

[illegible]

[illegible]

延喜御時女蔵人[illegible]

舎人かくるとて車よりわすれたるきぬをさ
出しまいらせたると検非違使庁
名をとられといひかけたりける

女蔵人内匠

たゝすてゝふりはへてこそかへさめ
あめのしたには検非違使のきぬをもへき
かくこひわれはそてのかくなは
ときはなる事おもひよそへつゝまのそこに
こゝまてゝ浮かるまゝへ日のくれにそほ
名くかれは

周防内侍

あかしつゝ夕の雲とたゆもとは
あはれかくこそしも雑のさけいゝを
まつしれ

前大僧正道意

思ひいてゝ世をそむきなんとこゝの
かゝるねよやねもあはれなん

西行法師

うきあまりねかえても心のもよほ
いつきそいかよう修業しけれは
なほゆかし心の色もうしあるも
とふとこそかなしみのあはれ思ふかは

宰相ちとせまて京よりまかりける遠江
昨日はしらぬ人なりしかとけふは
後はかた人の心よりうちとけて
うれしともたのもしともおもひぬへき
守覚法親王五十首哥よませ
侍りけるに　寂蓮法師
うらみわひまたしいまはの身なれとも
なかさいふこそ心すかね
遠慮のいかにさためおもふ
身のうきをも思ひさためはたまのもん

ゆくともいのちあらしもわかるくもの
前大僧正慈円
何事をおもふ人そと人とはゝ
こたへぬさきにそてそぬるへき
後に遠さかりにけるやうなる人の年
うへのまた夕さりの行
くちくへて世によふるならい
あらぬともちよとも
和泉のかみいかにおもふ遠慮のいは
草わの葉やまとめ年

ほこさき人とこそはなかしはとこなつもせ

袖はさそ夜はかなとさためても　左衛門督通具
なをさひし月やこゝろをさそふらん

有家卿下
君の代はあつしはなすふちせもかはらぬ
ちつくともまそハおもしらぬなみ

家隆卿下
おほかたの秋のねさめのなかき夜も
君をそいのる身をおもふとて

松のしまやあまの月のあはれはつゝ
あつまれ夢のみのうへし君よ
千とせの山もちきのよ月も猶見も
なをしるし神代千代ふるほとよ

雅経卿下
君のはかよあへるほとわかれこをとう
みちをハたゝはまひりまのうち

皇太后宮大夫俊成女
おしなへてもろこゝは月もしらうの
たゝしめるこゝろかはの嬉をそうしかへそ

千五百番歌合に
摂政太政大臣
うきしつみこむよはさてもいかにそと
心にとひてこたへかねぬる
題しらす
[illegible]

守覚法親王
[illegible]

権中納言公経
[illegible]

[illegible]法師
[illegible]

左近中将公衡
[illegible]

題しらす　よみ人しらす

憂きたらぬ我身はあるよりもうの
夢をとうつゝまさる心侍る

源師光

よきふのうかいおしまつと命かな
惜しむともたのこうちれは

賀茂重保

さらましともたのむ心はいかにせん
思へはさつらぬをありまれはしき

藤原長延

はかなくとおもへはやすくそなりきて
うらみとそふかきわかれのなかに

入道前関白家百首のよませ侍
けるに

前参議教長

いのちはのほりゆくつらぬつらくとも
さらましくてみこそをならぬ

題不知　大僧都覚弁

恋しくは月はいかにとやま川
つらきぬ侍りけるわすれぬ袖のうへ

よみ人しらす侍りける百首の中に源

長らへ乃夜半ハ流れつしりもしきあく
ま書つきて侍りける
　　　　　　隆信
うきふしの気色をよしなしかなしよ
身さへうくもやまぬ河の水
名乃尾の山にわたりて秋の末つ方
ひもさそひ紅おそく侍りけるに
おもはえぬを見そならぬ哉
　　　　　　鴨長明
見るまゝにかはりゆく世の
あすよりは暮のけしきも見えす
ましのゝ　源秀景
かすみしくはるかなる思出の
あかれはとそもしのふ
　　　　　　西行法師
ゆつくしもと波まてひとくさほそ
さいのいそまけふくなるを（おもん）
月はおなしにしてはんを送る
やこそすもあとの方をそすまん
二十二日京の中より

前大僧正慈円

おもふ事なとゝふ人のなかるらん
あふけはそらに月そさやけき

すみなれてまよひをはなれ[illegible]
つきせぬものはなかりけるかな

西行法師
出家の後[illegible]侍ける月日ある
あまたたひかはりけるに

浮世出し月日の影のめくりきて
かはらぬみちを又てらすらむ

前僧都全真西国のかたによそへ侍
ける時つかはしける

前仁法親王

人しれはそれとみしにもなれてたに
ふかく月まてたくやすら[illegible]

前大僧正慈円返し

おもひやるこゝろもつきぬよにつゝ
はるかなる

前大納言経家
思ふのくれはいつこそはいそく
書(?)[illegible]してよはれの[illegible]

春はつるをしむ花の心を

大納言

とりまそへハ人ちかきかたをはなれは

いつかはとおもひよるなんとすらむ

新三位　清信公

あさくはやまのよ思ふをふるなき

いつまてえいけりとも思ひしられ年

皇嘉門院

なふとてやかへりよあふまはくさはなるよ

うれしきもたゝまふひあかすわ

藤原基俊

さしつらくちるをもゝるゝ上しい

さくらなるくはちるをもとふ花

松はまの情ならむとせかへる御

性空上人

ちよいのちさかし世にもゆく石にわ

くらとしもしさらくもあかる

暮いしさ　源俊頼朝臣

ゆきふるをよそのはなみたそ

いつとせるつきもたちなきあらわ

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

殷富門院大輔

[illegible]

宜秋門院丹後

[illegible]

式子内親王

[illegible]

左京大夫顕輔

衣手は山井の水にかけみえし

[illegible]

れし　道信朝臣

ゆきへの山の井はおそへのわせきえ
まさりしやかしくはやさまし

後冷泉院御時大嘗会主基方
のくにとくて　資業朝臣
つらなる主帝御時思ひ出
かへこゆ流のしくゝまぬ

藤原清輔

やまちのゝきたよのあさこゆる
おぬむしけらゝし

秋夜きりのふかうしはるしとき
よもすがら人にいはれぬ涙とも
こもよりよるのなみにと沈
みたし

天暦御製

梅花の枝の匂ひの草をくし
へつてはしてもあまし匂ひを

中務卿具平親王

あかめつて香をふことはりしよ
刻のはなしきのせぬし

小野小町

新古しを

木くしの風よ紅葉ちりてく人（以下不明）
うちたえて紅葉ちりつもるつる（不明）
遍照寺にてのよみ人けふ詠たる
皇太后宮大夫俊成
嵐ふくみねのもみぢの日にそへて
もろくなりゆくわがなみだかな
崇徳院御哥
うたゝねは荻ふく風におどろけど
なかき夢ぢはさむる時なき
式内に
竹の葉に風ふきよはる夕くれの
もののあはれは秋としもなし
和泉式部
夕くれは雲のけしきを見るからに
なかめしとおもふこゝろこそつけ
なくさめぬ名ごりもなくのちのよすがにとかく
入あひのかねの声をきく
西行法師
あはれつゝ風入る道の
あはれもやなかりしまゝのときの山

暁のかたらひ

皇太后宮大夫俊成

あかつきとつけの枕をそはたてゝ
きくもかなしき鐘の音かな

式子内親王

暁のゆふつけ鳥そあはれなる
なかきねふりを思ふ枕に

冬は明なんと思ふらむおきもせぬ人
のとも侍られは

和泉式部

あかつきのまゝにたちかへりそなたへは

こよひはほとゝきすをこそかたらへ人
郭公の
なくこゑのはつかにきこえしは
あかつきのころなりけれは
逢坂へのまて大納言へ
こゝにとまりけるほとに
のなかのつきはゝ
大僧正行尊
あかつきとそはつれなくみえし
夜をこめてもつれなく思ひこそすれ

百首哥よませ侍ける時　土御門内大臣

位山あとをたつねてのほれとも
子をおもふ道に猶まよひぬる

百首哥奉りけるに懐旧哥　皇太后宮大夫俊成

むかしたにむかしと思ひしたらちねの
猶恋しきそはかなかりける

述懐百首哥のよみ侍ける　[illegible]

こゝのまゝのとのくもゐ(?)をなか(?)めつゝ
思へいまそ(?)ちかひ(?)しあ(?)と(?)はすれ
夕暮は蝉のこゑもそ(?)のこゑけまさる(?)
ちを(?)常よりも秋とや(?)人(?)そ(?)

僧正遍昭

すゑのつゆもとのしつくや世の中の
をくれ先たつためしなるらん

西宮左大臣

光まつえたにかゝれる露の命
消はてねとや春のつれなき(?)

[illegible]

[illegible]

寂蓮法師

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

小篠原風まつ露の消やらて
このひとふしを思ひおくかな

前大僧正慈円

[illegible]

世中をいとひ入ぬ身のくるしき
思ふまゝにかなはぬ事とも多く
よをいとふかひもなくてまたよ
のなかにすみそめしゆへかく
心ならぬ思ひよりもすからは
なき身をそめてやすき世をあらはせん
何ゆゑにこの世をすてゝ
人のいふやうにしてゆく
名をのみのこしてのちの世
あらましはこのよに

世をいとふ名をたにもさはとゝめ置て
数ならぬ身の思出にせん
西行法師
身のすてかたき事を思ひしるやうに候は
うき世をいとひてかくれぬるをは
いみしき人と世のあまねくいひもて
あつかひけるやうにしつゝ思ひしを
此事をよそにするかひの
ませつゝのこしおかまほしき
皇太后宮大夫俊成

むつれきてたゝ浮世の秋
つかへましのふかきすゝのとし
なかくゝにいける比大宮よ彰里
て思ひともくれハ家人物かは
なをとゝや事よしき侍りけれ
大僧正行尊
おもひ出てたれかはとめん分きつるゝ山ふかみ
あはれともいかにいひてか世にもたへせす
題しらす
ひとのよのゆめをのかれてよはあけぬ

よそものくてもとしふるかせ
前大僧正慈円
いつの事浮世にはいる山路にもそふ
あはれとおもわれてハかりとのきぬ
後鳥羽院下野
うきなからまた山里はたつねこめん
在明の月のみすみて心あらん
宜秋門院丹後
なかなかにあはれひとつを
ときはなる山の

よをのかれてよめる　山田法師
さるのをもあきに限くよゝに流れゆく
まりしみはほとゝもおもひつゝのや
題しらす　寂蓮法師
数ならぬ身はなきものになしはてつ
たかためにかは世をもうらみむ
法橋顕昭（？）
夜のことにかはるをしらすとも人や
さそふ月のかけさへそのとくしき哉

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに
つかうまつりける　源師光
なからへていくよかうきよにすみのほし
うきものは秋をかなしと思ひつゝ
たいしらす　藤原家賢（？）
うき世をいとふこゝろはなくとも
いつはりの月はいくよをこゝろみ侍
西行法師
あきくれあはれ春もゝみちしこのよそ
あはれしきまゝきしあるしなる

清輔朝臣
なからへは又このころやしのはれん
うしとみし世そいまはこひしき
寂蓮人々にすゝめて百首歌よませ侍
けるにいなひ侍りて熊野にまう
てける道にて夢になに事もお
とろへゆけとこの道こそ世のすゑにかは
らぬものはあれなほこのうた
よむへきよし別当湛快三位俊成
に申とみ侍りておとろきなからこのうたを
いそきよみいたしてつかはしけるおく
にかきつけ侍ける　西行法師
末の世もこのなさけのみかはらすと
見し夢なくはよそにきかまし
千載集えらひ侍けるときふる
き人々のうたをみて
皇太后宮大夫俊成
ゆくすゑは我をもしのふ人やあらん
むかしをおもふこゝろならひに
崇徳院百首歌めしけるに無常

哥

夜半まてといつの夜もかくすむ月の秋まて
むかしおもひいてゝきかねつゝ雲
百首哥の中に
式子内親王
くまもなくやとるもまつへき世のいきの
まちえけるそはしかはりし[illegible]
はしたよはかりておもひしらるゝ
ゆふくれの[illegible]
花山院[illegible]
津[illegible]よるのまにしらぬくしなくして

ゆふつゆのきのしはしもまたはかなく秋
題しらす　中務卿具平親王
きのふみしやこ[illegible]はふことゝもおとろけと
なをきしこそ[illegible]ゆめにそありける
蝉丸
秋風になひくあさちの末毎に
をくしら露のあはれ世中
世中はとてもかくてもおなしこと
宮もわらやもはてしなけれは

新古今和歌集巻第十九

神祇哥

志るらめやけふの子の日の姫小松
おひんすゑまてさかゆへしとは

この哥ハ日吉社司社頭の後の山に
山ざまにかりやして子日して侍りける夜
の夢にみえけるとなん

なさけなくおるゝ人つらしわか宿の
あるしわすれぬ梅のたち枝を

この哥ハ建久二年春比つくしへ
まかりけるものゝ安楽寺の梅を
折て侍りける夜の夢にみえけるとなん

ある本

猶頼めしめちか原のさせも草わか世の中に
にこそとゝへんきくの男かたのみこと
此哥ハ息猶寺乃面遠歩つくる
しめはうるは寺日乃枝なれ
神よりかへてかゝるとまうん
更やとこなむふ一兀やうなかこさきの
いかにいはんやわかなやこゑなん

侍らしの御心ハとゝのへ侍る
ゆかりの事在中ハ経てもとゝもすゝきよしの
松がねをひきのかたきなを
けふハある人にしるしくや人の
あさくハとの御物をすゝめの松の義
なき世のかたみんとおもひて業平
源氏物語としとふ人いへ里
むかしの人ハさして彼こゝろの恋乃
久しき代々にいひ伝へてめて
伊勢物語よ侍者より昔のは侍

縁ありし給へとこそまとまて
人さし縁さへなやしともちりや縁なは
縁とくふかきまそへて君なとゝりおもへ
すこのハ侍賢門院の御かしのやまとのか
たよわき野への御そて給へるよこそ
日へ御そてつへ君よし夢よりかへる
見えれとしとゝの御かけんとなき御の
里過すりくるをあへ見は侍るよ綾
しかめくるともへ
なくちさまゝ経ともかくのよたもてとわ

思ひやることさへも忘れし
は京ハ見えもうるほりに住ける人は遊
興へこそ千代へんと歌を忘
象つりて住ける事ハみつくつりわ
者也ハいさ二派をめてりきんと
題て清書かよ好しつまりける夜
は夢にみえしくるをとみえん
思ふこと多りの歩まうるもれくうる蔵は
さりしよとれもとうふかりしむ奉
冊まハ身まはしつかう事をと歌る

東は方へゆかわろんと思ひうちける
人は遊ひ歩は清書かよ通せて付
かるいあ々とりみて々ちかとく
歌たは其人はうつりよろうけは
まりこ年てんみて思ちかれかりわて
賀茂は清路とかん
鏡えよもの言ひ見てゝりしのりわは御よ
しつるのわかんとこし
是まりは賀茂に住てけるり人は 林
夢にみえてかるとゆへ里

おきつしまもりてもさかへよろつよに
人の心をわすれさらめや
石清水の御ことを人皇
十の御よりしはしのよにはゝる
あまてらすひかりのかはきせぬ
此歌ハ醍醐天皇御時御撰
ときの作文よみてよみける時
詫宣のよみけるとそ
延喜六年日本紀竟宴ノ神日本
磐余彦天皇

大江千古

しら波よするなきさのうへにこそ
渚やつみけんとをまてみるらん

猿田彦　　紀淑望

久方のあまのやちまたにかけりても
くらふらし君をそてらへるかなし

玉依姫　　三統理平

花のいろはあさきみとりの舟にそ
秋はきはいつも色ふかきかな
賀茂社の午日にてけりける

やまとかも海にあらしのふかぬまも
いつきみ渚りこそまつらの舟
神楽をよみ侍りけるに
紀貫之
をく霜に色もかはらぬ榊葉の
かをやは人のとめてきつらん
臨時祭をよみ侍りける
宮人のすれる衣にゆふだすき
かけて心をたれによすらん
左大将にて侍りける時勅使にて太神
宮にまうでて侍りけるに
摂政太政大臣
神風やみもすそ川のそのかみに
契りしことのすゑをたがふな
日吉社にたてまつりける歌の中に
前大僧正慈円
[illegible]川の末
[illegible]
[illegible]勅使にて[illegible]
[illegible]

乃女房はすゝむ送りける
よみ人しらす
さきてきくもありけもめつらしき
あはれ人まとりきましの付は
なし

春宮権大夫公継
神かせやいすゝの河の宮はしら
いく千世すめとたてはしめけむ

太神宮え乃三の歌中に

太上天皇
詠やかみちの山にくもきえて
ゆふへの空をいてむ月かけ

神風やとよみてくらになひくして
かけてあふくといふもかしこし

題しらす　西行法師
宮柱したついはねにしきたてゝ
つゆもくもらぬ日のみかけかな
神ち山月さやかなるちかひありて
あめのしたをはてらすなりけり
伊勢乃月読乃社にまいりて月を
見てよめる

さやかなる影は雲井にすむ月の
かけやいつくもおなし月かけ
袖ぬれてよその月をなかめつゝ

左京大夫顕輔

更けにけるわか身のかけをおもふまに
五十路あまり秋の月
宮の御殿にて月をみてよみ侍る

しのふれは
中院入道右大臣

立帰りあはれとも思はゝ月

あれもみつ川のゆかしき
入道右大臣家百首歌よみ侍る
月の歌
皇太后宮大夫俊成
袖の涙やいかにとゝめん
行く末もすめる月かな
俊恵法師
うきよをやおもひわすれてなかめまし
ゆかしき月のかけそちる
五十年をはるかになかめつゝ
静空

神風や山田の原のさかき葉に
心のしめをかけぬ日そなき

社頭納涼といふことを

大中臣明親

五十鈴川そらやまたきに秋の聲
したつ岩ねの松の夕風

香椎宮の杉を詠侍ける

よみ人しらす

千早振かしひの宮のあや杉は
神のみそきにたてるなりけり

八幡宮の権官にて年久しかりける
ことを思ひうれへて御神楽の夜まいりて
榊に結ひつけ侍ける

法印成清

さかき葉にそのいふかひはなけれとも
神に心をかけぬ日そなき

賀茂にまうて侍ける

周防内侍

年をへてうきかけをのみうつしつゝ
かゝる世もうれしきみたらしの

文治六年女御入内の屏風に臨時の
祭かきたる所によみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川に影見えて
氷にすれる山あゐのそて

社頭雪といふこゝろをよみ侍りける

祝部俊通

木綿しての風にみたるゝおとさえて
庭しろたへに雪そつもれる

十首歌合の中に神祇をよめる

右大将忠通

君をいのる心の色を人とはゝ
たゝすの宮のあけの玉かき

[illegible]和歌の会に社頭祝の心を[illegible]

賀茂重保

あとたれし神にあふひのなかりせは
何にたのみをかけて過まし

社頭とよめる[illegible]

しけるつゝみてよろつ代にはかれ

賀茂葉草

大傳田村といふ所にわたりて此わたりを見しのひ竜
みそきには鴨の上下の神
鴨社の会とて人こよみけるに
月を

鴨長明

石河や瀬見の小河の清けれは
月もなかれをたつねてそすむ

年ことにはかりの鴨の葵日祭りにまうて
関防内侍かりつゝしらゆふ

中納言資仲

萬代とも見のまくの中原かけてひと
ほりかはのかみのよしいかり

文治二年四月入内御屏風に春日まつり
なと

入道前関白太政大臣

ふるきあとの藤の神の名やしるくして年
さそよ波とてにほふ花川の神
家も百よの流れはする神祇也
知りなを

天の下みかさの山の影ならて
何れの人のかたすか神とはしらしや

皇太后宮大夫俊成

春日野のおとろのみちのうもれ水すゑたに神のしるしあらはせ

大原野祭にまゐりて周防内侍につかはしける　藤原伊家

千代まても心してふけもみちはを神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院障子に小塩山書たる所　太上天皇

をしほ山神のしるしを松の葉に

契りし色はかへるときなき

日吉社にたてまつりける歌の中に

二宮を

やはらくる光にあまる影なれや五十鈴河原の秋の夜の月

[illegible]

[illegible]

もろ人の袖もひとつに浦風は
こゝろすゝしきそのもとかな
小野まよりかへて暮のをりよめる
ときかぬをは思ひあらそて秋ちきらふく
かつくのみよしへゆきよるかへ
熊野へ詣して帰りける時かへるさに花
のちるをみてあらはれけるを浦にてまて
白河院御歌
咲ちらふ花のうちもなかくまて
神かめくふかくしそくまさく

熊野詣のまゐりてたち侍り
太上天皇
岩にむす苔ぬるゝ清熊野の
山ふかみあらふ心はしるしの跡
新宮に詣しつゝそ熊野川
にて
熊の川くたるや早瀬のなかれては
さゝなみの聞ぬをきゝの風情
白河院熊野にまいりて給へまゐる
よに流れし人の瀬をのまゝそそ

新宮へまうて侍りけるに

後徳大寺左大臣

立のほるしほやの煙浦風に
なひくを神の心ともかな

熊野へまうて侍りしに岩代の王子に
人ゝの名なと書付させてしはし
侍りしに拝殿の長押に書付侍る
し侍る　太上天皇

岩代の神はしるらんしるへせよ
たのむうき世の夢の行末

熊野の本宮やけて年の内に
遷宮侍りしにまいりて

太上天皇

契りあれはうれしきかゝる折にも逢ぬ
忘るな神も行末の空

賀茂にまいり侍る時白山に詣て
さすらへるを思ひてよみ侍る人
いてゝ又まそ住と見へて

太宰大弐重家

としぬともうけしらゝわすれそ

うしはきの香をあつめけるとも人よ
一品親王の歌合に法師に嫌はれて
人をうらみ侍りけるころ
吉水僧正
まつよひの月さし梅の枝に風吹は
うきのしるしよいとひぬりかな
あかぬ所の屏風の絵に十月神
まつふ家のあたりに人あまるかなるを
人の袖くすやなと
能宣朝臣

神無月の霜もちらしけりける
まどゐとも見え原のまとの紅葉よ
延喜御時屏風によみ神楽の
心をよみ侍りける
貫之
川船さやかに見えて人もあはれも
かすみのほとりいつなにの
よみ人しらず 筆

新古今和歌集巻第二十

釈教歌

なほたのめしめちか原のさせも草
わか世の中にあらんかきりは

なにかおもふなにかはなけく世中は
たゝあさかほの花の上の露

このふた歌は清水観音の御歌となん
いひつたへたる

智縁上人伯耆の大山にまうてゝ出なんとしける暁夢に見えける
歌

山ふかく年ふるわれもあるものを
いつちか月の出て行らん

難波のみつの寺にて葦の葉の
そよくをきゝて　行基菩薩

あしそよくしほせの波のいつまてか
うきよの中にうかひわたらん

比叡山中堂建立の時
伝教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち

我立杣に冥加あらせたまへ

入唐時云々　　智証大師

のりのふねさしてゆく身そもろもろの
神も仏も我をみそなへ

菩提寺乃講堂乃柱よむしのくひたりける
うたとなん

しるへあるときにたにゆけ極楽の
みちにまとへる世の中の人

みたけの笙の岩屋にこもりて
日蔵上人

よみける

寂寞の苔の岩戸のしつけきに
なみたのあめのふらぬ日そなき

臨終正念ならんことを思てよめる
法円上人

南無阿弥陀仏の御手にかくる糸の
をはりみたれぬこゝろともかな

題しらす　　僧都源信

われたにもまつ極楽にむまれなは
しるもしらぬもみなむかへてん

天王寺の亀井の水を御らんして

上東門院

はかなさを舞はふしもをたとへつゝ
みのりのちりをもとめてまなふかな

法華経二十八品の心を人々によませ侍り
けるに 提婆品のこゝろを
法成寺入道前太政大臣

わたつうみのそこよりきつるほともなく
このみなからに身をそきたるはなれぬる

勧持品の心を
大納言斉信

の深きみねの金はなれ草の枝しのとも筆
法ときくほとのことはしらぬはなもかな

五月はかりに雲林院の菩提講にまうて
てよみ侍りける
肥後

紫の雲のかけてもおもひきや春の霞に
のりのはなもちるらむ花とかはるはいかに

涅槃経よみ侍るとて夢に見しをかたるに
ちるを池の水もときわかねとも

深きちることのまことの夜のあけてこそ

[illegible]人の[illegible]の
[illegible]
[illegible]のふかき[illegible]月[illegible]

[illegible]經の心をよみ侍りける
前大僧正慈圓

ねがはくはしばしやみぢにやすらひて
かゝげやせまし法のともし火

[illegible]
[illegible]

極楽へまだわが心ゆきつかず
ひつじのあゆみしばしとゞまれ

觀心如月輪若在霧中の心を
權僧正公胤

[illegible]雲まに
ほのかに[illegible]の月

家に百首歌よみ侍りける時十界の
心をよみ侍りけるに　縁覺の心を
攝政太政大臣

奥山にひとりうき世はさとりにき
つねなき色をかぜにながめて

つみふかき花乃色をも風にふかせて
心経乃心を　小侍従
色にのみ染し心のくやしきを
むなしと説ける法乃うれしさ
摂政太政大臣家に百首歌合に
十楽乃こゝろを読侍けるに　聖
衆来迎楽　寂蓮法師
紫乃雲路にさそふ琴乃音に
うき世をはらふ嶺乃松風
蓮華初開楽

是やこのうき世乃外の春ならん
花乃とほその明ほのゝ空
快楽不退楽
春秋にかきらぬ花にをく露は
をくれさきたつうらみやはある
引接結縁楽
立帰りくるしき海にをく網も
ふかきえにこそ心ひくらめ
法花経乃二十八品乃歌よませ侍りけるに
方便品乃　唯有一乗法の心を

前大僧正慈圓

ほのこまもわのはふるぬはやまへしなく
ふく嵐にしらこゑくぬゑ

化城喩品　化作大城郭

思ふなるまさきのそきてやすく
やとるおくりも月とはおもはれ

分別功徳品　或住不退地

鷲の山にふきくる峯はみなかくて
いつのまやとたれくへふきし

普門品　心念不空過

ともかくてなるしたつきとかもしろ
名をはなれわたきはいまるるみれ雲

水渚常不満といふ心を

崇徳院御製

ともなへるに千きるかけとしみふへきかな
いかなさひをしほるたなりるみるまとのは

光照高山

あまりもゝ次嶺のつきはやくめぐ
まつはあるのし吾法のゆみ

[illegible]百五十首時五智

のみぞと　妙観察智

入道前関白太政大臣

そこきよく仏のみちをもとめてぞこゝろを
いのちとしるまのかゝみをも見ん

勧持品　　正三位経家

たえしのひていくよもあしほやさゝ
のちのよしあくつみも命をもおしまず

法師品　加刀杖瓦石念仏故應忍

忍のみちと　寂蓮法師　としへし
ぬのさきなかのあまたうちまさにきせぬかな

うきをさへしのびしのぶのすゑのわかれ

五百弟子品　内秘菩薩行乃心を

前大僧正慈円

ほのしへの志のたまを衣のうらにも
うれしくもかくれなくもかゝるわ
人こゝろものありそ涼はるかなる
涼ひうきを

二乗但空智如螢火

寂然法師

只このへのほたるのかげをよるそてに
獨ゆくつまのかゝやくときは

菩薩清涼月遊於畢竟空
雲きえそれふかくすみにける
うきよのなかをめくる月の影
梅檀香風悦可衆心
吹風に花梅やちりぬらん
たちしけるうつりかの庭にみち
作是教已復至他國
やとのうちも我あるまに
あさきのかすみのかけにかくれぬ
此日已過命即衰滅
けふもまたくれぬとおとろく人のなき
入あひのかねにけふもくれぬと
悲鳴呦咽痛戀本群
素覺法師
草ふかき狩場の小野をたちいてゝ
ともまとふらしつまこふる
棄恩入無為
寂然法師
そむきぬるはいかなる人の迴向して
おもひわかれしも人はまつ身か

合會有別離　源季廣

逢みてもあはぬは別るゝ雲の
つらきこの世のさかとしれるに

聞名欲往生　寂光浄帰
立のまき偲君かまつのゆきの松
またれもいのちはかなきはてくれは

心懐恋慕渇仰於仏
わか秋よしその御影の遠しきに
夢のまもみえてよやま深ちかの月

十戒哥よみ侍りける中に　寂然

不殺生戒
わたつ海のふかきにしつむいさりせて
たもつかひある法をもとめよ

不偸盗戒
うきくさの一葉なりとも磯かくれ
おもひなかけそおきつしら波

不邪婬戒
さらぬたにおもきかうへのさよ衣
わかつまならぬつまな重ねそ

不酤酒戒

花のもと月の前のさかつきハ酒もゆるし

さはれとまよひの道の始

入道者開白説よ十如是のへ給

を侍るなり　如是報

二乗縁覚波

らするも於んつの於に思ひ知なき

めつよこの入にそとうとみぬ

侍賢の縁如来秘言ハにはすゝめて

二十八品五のよ品をはてゝなるよ序品

度度諸衆生其数無有量乃

こゝ侍るを　自在右宮也縁

わるゆへきなそもをもちかね　にし於

あまよそはちのひかりん

数福の縁よ極楽六時讃乃絵よ

は於へき斎におそもつるへきよの

侍りつるよ流ちりつる時よ大衆流

おすそ於歓喜讃侍ちえて

ともこき入りをたそもかえいし

かくきの出くりの於かえそせなき

暁到て浜乃都をは岸まちかゐる
こほりく
ほのしらくも乃上乃のはよいしくきふ
岩しつえのくはあのつきさ乃い忘
百年寿乃おまる毎日晨朝入諸
定乃いうけゆくさ
武子内親王
しつの衣もぬおなつき毎よみつ也ハ
まろぬのき夜は夢のるしお
發心和合集乃歌普門品種く
諸悪趣　遊子内親王
冬之事をいつくよそしよの契へ紀
しあ乃程のんみこそまるのハ
五百弟子品乃心ほを　儀同源信
むのふ夜のさらたのへてそ
きりのみてまつゆきへふまし
維摩経十喩乃中に此身
如夢といふ心ほを
赤染衛門

ゆめや夢うつゝや夢とわかぬかな
いかなる世にかさめんとすらん
二月十五日のくれかたに伊勢大輔
のもとへつかはしける
相模
つねよりもけふのけふりのたよりにや
にしをはるかに思ひやる覧
返し 伊勢大輔
けふはいとゝ涙にくれぬ西の山
おもひいりあひのかねのこゑさへ

西行法師をよひ侍りけるにまゐる
へきよし申なからまうてこて月
のあかゝりけるにかとのまへを
とをるときゝてよみてつかはしける
待賢門院堀川
にしへゆくしるへとたのむ月かけの
そらたのめこそかひなかりけれ
返し 西行法師
たちいらて雲間をわけし月かけは
またぬけしきやそらにみえけん

人々すゝめけるに結縁経
供養しけるに即往安楽
世界のこゝろをよみ侍る

勝西上人

むかしみし月はいてさるそら
こよひや君かしるへなるらん

観心をよみ侍りける

西行法師

やみはれて心のそらにすむ月は
西の山へや
ちかくなるらん

竊以

昔仲尼在川上曰逝者如斯夫不舎昼
夜と識哉斯言歎逝景事未易識
壹之年ゝして歎ゝよもくゝし亡賤孤
とゝふりけれは唯於吾君乃御恩澤
貴賤ゝあまねくゝ温故知新を給ひ
絶たるをつき廃れたるをおこし世
おさまり唐堯虞舜禹湯文武の
政乃ことをまなびつゝ政をとり給ひて聖帝
と申給ひ御めぐみよりなる事いとたかき
もゝく人とゝふりけりめでたしとゝなしとも吾

気能ありて霊妙無常にして道故に
君のまゐりまするにいと優しきまつりも
あはれ父母なりまさに力をいれ候はば
ふかきましたりしは信ありし朋友に交は
なくて後ありし夫婦をと遂まぬ兄弟
子孫に至るまで壮歳よりも式ありて孫
まめにかもへる道に立てるもけしいつ
神のも優こともして星霜をかさねや
きめての後まに此八乃程貫乃仏代
小傑年つめともを終り三百歳をも古事を

しめんと筆を後はり様よる所は孫見
く優しく後乃事なりましもいは
侍まきともいの人すはなりもしらは
りここはまかりに志のりふ乃ことにえ八おは
なりまかり人乃も八口人佛神躰
又忠臣又子まち明女乃心をしもを
乃或いは人にいひなまもふ川ふやとは月
勤めんとかまをらいめらすに事をも志
めし或又神風もかへもはるのに河のよふ
もし人を君の代はりまするあかりつきと

もと賀し給ひし守乃志ふ乃こゝろを見るに安
いとゝこゝろもおろか成ける尽くしまたにふ以て
さ加ゆめ給ひしとも聞よ梅のにほひて福
乃六義とし乃盛者月に付けてまこゝろす
尽ち乃給ひぬ者先に所謂賢貫乃もと
へ乃尽ちまちくしは乃ふミいさ
ゆゝしに月のもと送ることのはあき
あやしうあるまといへとも声にも
とよう思ひ蒙乃ゆかり拙く字ことか
普道乃あそまり乃こゝろあり小も

し後見乃寿かなくいたとときこ
ともさゝのふる乃ゝ

寛永第六
季夏日